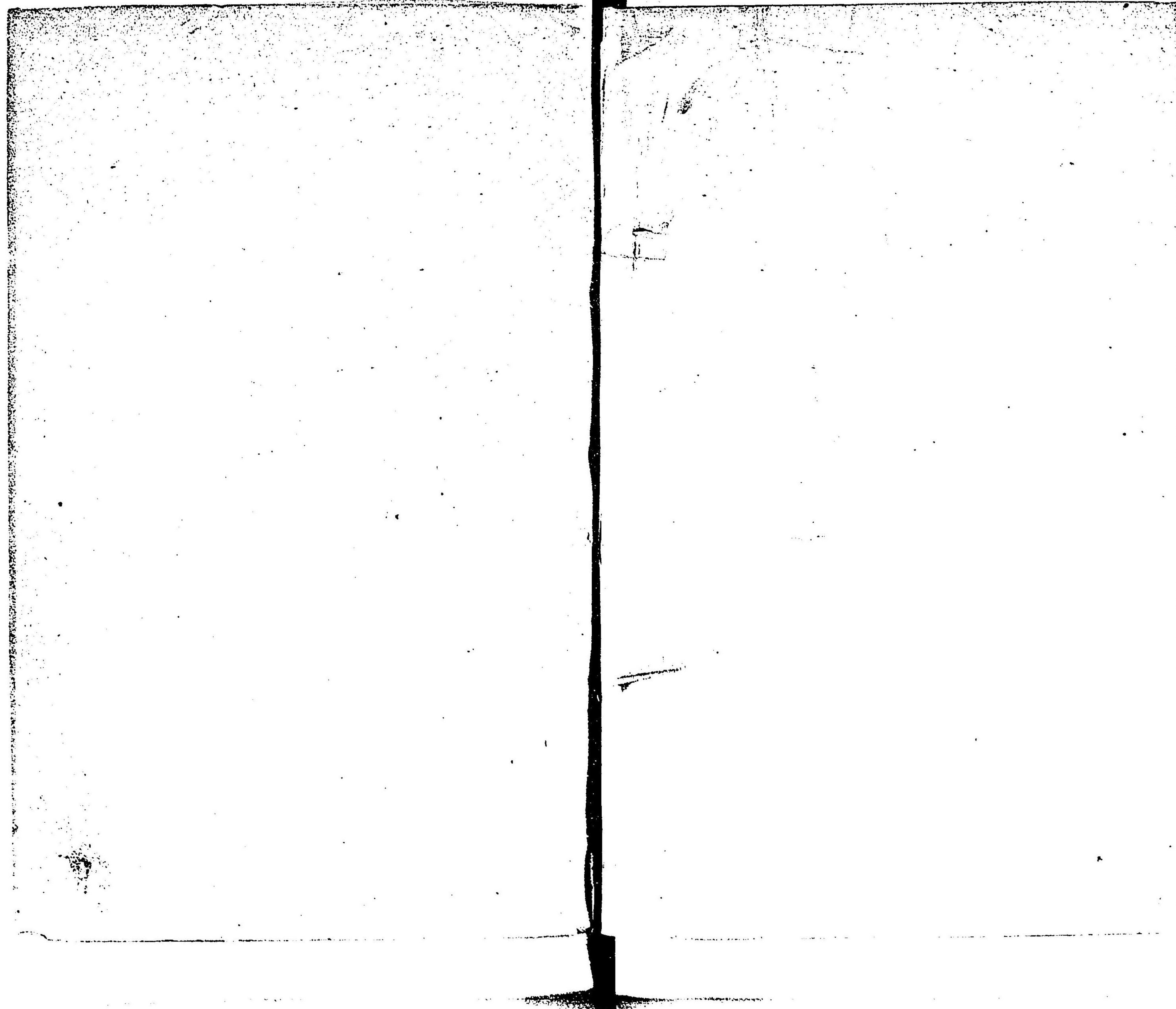


謠曲家會圖

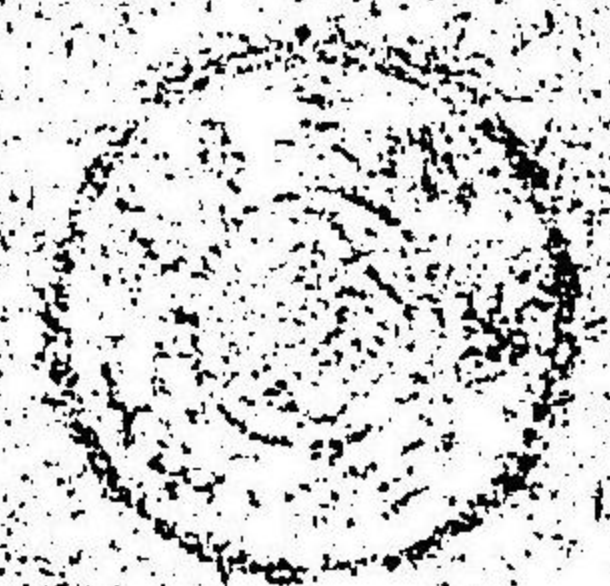
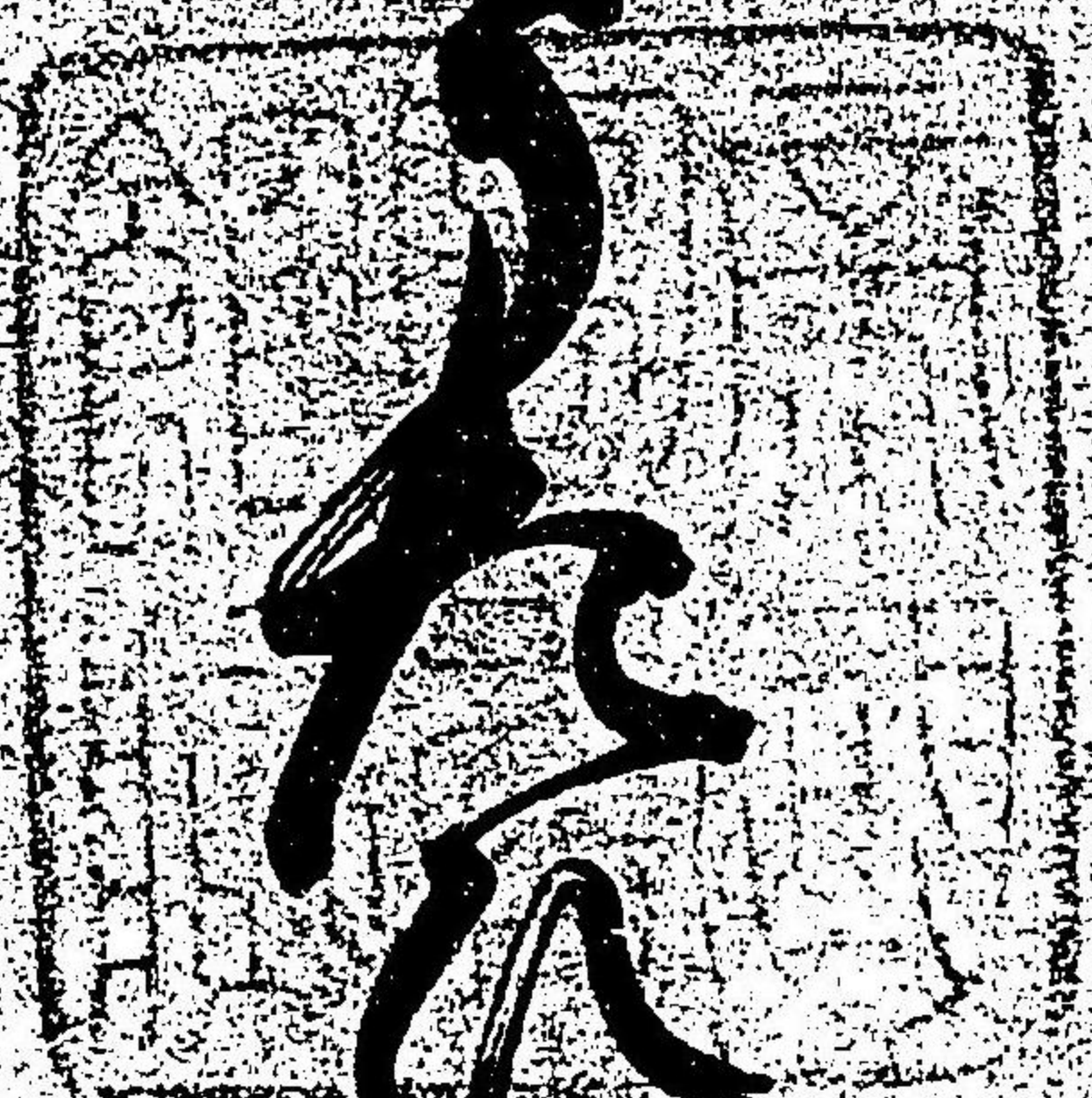
五之卷





古今圖書集成

(第五卷)



謠曲訓蒙圖會第五卷目次

三輪
殺生石
野宮
松虫
東岸居士
松尾
女郎花
葛城
蟬丸
野守
岩船
正尊
玉葛

一頁
八頁
十五頁
二十頁
二十三頁
二十六頁
三十一頁
三十六頁
四十二頁
五十一頁
五十八頁
六十七頁
七十五頁
八十一頁
八十九頁

卷絹
當麻
金札
春榮
姨捨
三笑
志賀
皇帝
梅枝
和布刈
花筐
鸚鵡小町
吳服
自然居士

九十六頁
百二頁
百十頁
百十五頁
百二十八頁
百三十六頁
頁四十頁
百四十七頁
百五十三頁
百五十九頁
百六十六頁
百七十六頁
百八十四頁
百九十一頁

○目次

○三輪
舊事本記に。大
已貴神天の羽
車に駕し。虚空
を飛びて偏く
妾を求む。時に
節度縣に下り。
潜かは大陶証
の女。活依玉姫
に通す。其往來
人の知る所に
あらず。其女孕
めり。父母怪し
んでさふて曰
く誰人が來れ
る乎。女答へて
曰く神人あり



謠曲訓蒙圖會

謠曲校閱者 三浦銀太郎
編纂者 吉澤 徳潤

是は和州三輪の山陰に住居する。立賓と申沙門にて候。
扱も此程いつくごもなく女姓一人。毎日櫛あかの水を汲て
きたり候。今日も來りて候は。いか成者そご名を尋はやご
思ひ候。次第女ヨロク三輪の山本道もなし。檜はらの奥を尋む
實や老少不定とて。世の中々に身は残り。いく春秋をか送
りけん。淺ましやなす事なくていたつらに。うき年月を三輪
の里に。住居する女にて候。又此山陰に立賓僧都とて。貴き人

○三輪

屋上より来りて共に枕をふらぶ。是に於て之を顯はし見んを欲し。針を芋手巻につけて。神人の装にかけて。其糸を認めて之を見る。明旦に往くにしたがひ尋ね見るに。輪の孔より節度山を経て吉野に入り三諸山にささまる。其縮めるころ

の御入候程に。いつも嵯あかの水を汲て参り候。今日も又まいらはやく思ひ候。山頭にはよる弧輪の月を載き。洞口にはあした一片の雪をはく。山田もる僧都の身こそ悲しけれ。秋はてぬれば。ごふ人もなし。いかに此庵室のうちへ案内申候はん。案内申さんごはいつも來れる人か。山影門に入ておせごも出す。月光地にして拂へ共又生す。鳥聲ごこしなへにして老生ご靜なる山居。柴のあみ戸をおしひらき。かくしも尋ねきりしきみ。罪をたすけてたひ給へ。秋さむき窓のうちく。軒の松風うち時雨木の柴がきしく庭の面かごは葎やごちつらん。下樋の水音も苔に聞えて閑なる此山住ぞ淋しき。如何に上人に申へき事の候。秋も夜さむに成候へは。御衣を童に一重給候へ

の糸三わけなほのこれり故に號けて三輪山さ日ふさ見ゆ。江談に玄笈洛陽を去つて他國に赴く道に女人に來り會ひて衣を脱いでこれをおたふ女人これを得て和哥を詠すさあり。みつの輪は清く。淨きぞから衣くると思ふな

安間の事此衣を参らせ候へし。荒ありがたや候。さらば御暇申候へし。しばらく。扱々御身はいづくにすむ人ぞ栖を御明し候へ。わらはが栖は三輪のささ。山本ちかき所なりしかも我庵は。三わのやまもご戀しくはごは讀たれごも。何しに我をば問給ふべき去ながら。猶も不審に思しめさば訪ひきませ。杉立る門をしるしにて。尋給へ云捨てかき消ごごくに失にけり。此草庵を立出てくゆけば程なく三輪のささちかきあたりか山陰の。松はさきはのいろぞかし。杉村ばかりたつなる神垣は何くなるらん。ふしぎやな是成杉の二本を見れば有つる女人にあたへつる衣のかくりたるぞや。寄てみれば衣のつまに金色の文字すわれり。讀てみれば歌也。三の輪は清く清きぞから

得つともおぼはじ
又此論に三輪
明神を女体に
なせしや或は
伊勢の國あふ
きの郡にて獵
師の妻さふり
給ひ男子をう
みたまひけり
さ云ふことあ
ればこれらに
もさづきたる
もの歟。さにか
くに此論の出
處は是れらを
材料として作
れるものなる

衣。くるご思ふな。取ごをもはじ。後女。千早振。神も願の有故に
人の値遇に。あふぞ嬉しき。カキ。ふしぎやな是成すぎの
木陰より。妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の
衆生の願日をかなへ。御姿をまみえおはこませご。念願ふか
き感涙に。墨の衣を濡すぞや。女。はづかしなから我すがた。
上人にまみえ申へし罪をたすけてたびたまへ。女。いや罪
科は人間にあり。是は妙なる神道の。女。衆生濟度の方便な
るを。女。しばしまよひの。女。ひごころや。女。上同。女。姿ご三
輪の神く。ちはや掛帯引かへて。たゞはふりが着すな
る。ゑぼしかりぎぬ。裔の上にかへ。御影あらたにみえ給ふ
かたじけなの御事や。女。夫神代の昔物語は松代の衆生の
ため。濟度方便のこころわざ。品々以て世の爲なり。女。サシ。女。中に

べし。
今其仕組のあ
らましな記さ
んに和州三輪
の山陰に。玄資
さ云ふ僧都の住
みけるが。爰に
いつくさもし
れぬ女性の。毎
日權あかの水
を汲んで來れ
ること。僧都も
不善に思ひ居
りしが。今日こ
そはいかなる
者か名を尋れ
見んご待つ折

もこの敷島は。人敬つて神力ます。下同。五濁の塵にまじはり。し
ばしごころは足曳の大和國に年久しき夫婦の者あり。八千
代をこめし玉椿。かはらぬ色をたのみけるにされごも此人。
よるはくれ共ひるみえず。有夜のむつごに御身いかなる
故により。かく年月を送る身の。ひるをば何ごうばたまのよ
るならでかよひ給はぬはいご不審おほき事なり。唯同じく
はごこしなへに契りをこむべしご有しかば。彼人答へ云や
う。實も姿ははつかしのもりて余所にやしられなん。今より
後はかよふまじ。契もこよひばかりなりご。念頃に語れば。
さすが別れの悲しさに。かへる所をしらんごて。をだ巻に針
をつけ裔にこれをこち付て跡をひかへてしたひゆく。上女。ま
だ青柳のいごながく結ぶやはや玉のおのが力にさく蠲の。

から。彼の女ま
たくしきみ
あかの水を汲
みきたりて。庵
室のうちへ案
内を乞ふ。僧都
應じて案内さ
はいつも來給
ふ人か云ふ。
女僧都に云ふ
やう。秋も夜寒
むになりけれ
ば御ころもを
妾に一重たま
われさ。僧都そ
はやすきこと
なりさてやが

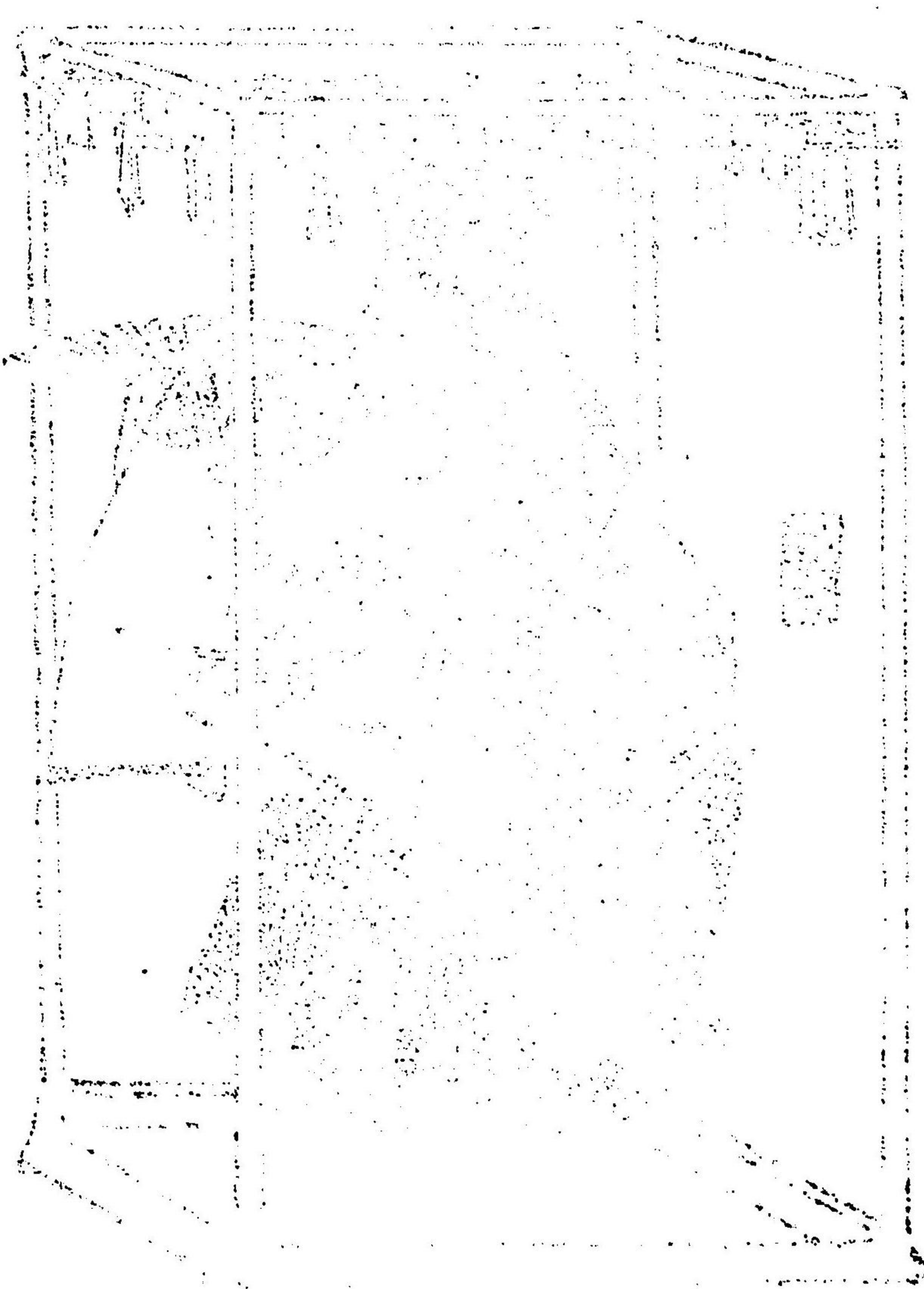
いと繰返し行く程に。此山本の神がきや。杉の下枝に留りた
りこはそもあさましや契りし人の姿か。其糸の三わけ残り
しより三輪のしるしのすぎし世を語るにつけてはづかしや
上ロシキ地 實有難き御相好。聞につけても法の道なほしも頼む
心かな 女上 迎も神代の物語。委くいさや顯し彼上人を慰め
ん 地上 先は岩戸の其初かくれし神を出さんごて八百萬の
神遊び。是ぞ神樂のはじめなる 女上 千早振 上ロカ 天の岩戸
を引立て 地 神は跡なく入給へは。常闇の世さ。はやなりぬ
下女 八百萬の神達。岩戸の前にて是をなけき。神樂をそうして
まひ給へは 上地 天照大神其時にいはこそ少しひらきたま
へば。又ごこの闇の雲晴て。日月ひかりかゝやけば。人のおもて
しろくご見ゆる 女上 面白やご神の御聲の 地 たへなるは

三輪



三
輪





て衣を興へけ
れば、女はこれ
をうけて行か
んとするを。
しばしと留め

じめの。ものがたり下キリ思へば伊勢と三輪の神。く。一イハシ身ミの御事いまさらなにご岩藏イハツラや。其關ソノセキの戸の夜も明アキラかく有
がたき夢ユメのつけ。さむるや名残なるらんく

て。御身はいづくに住み給ふ人ぞ。其栖をあかし給へと云ひければ。女は答へて妾か住家
は三輪のささ。山もと近きところなりしかもわか庵は。「戀しくはとふらひ來ませ我宿
は三輪の山もと杉たてる門」云ふ哥のころを言ひのこして。かきけすことくはう
せけり。僧都やがて草庵を立出でて。三輪明神のほそりに來たり。ふと道の邊の杉の立木
を見れば。先きに女にあたへつる衣のかくりたるをふしんに思ひ。立よりて見れば。其衣
のつまに金色の文字ありて

みつミツの輪は清く淨きぞから衣くると思ふなとさるさおもはじ
と一首のうたあり。折から其衣のかくりたる杉の木陰に聲ありて。「千早ふる神も願ひ
のあるゆへに人の値遇にあふぞうれしき」さ妙なる御聲の聞えければ。僧都は念願し
て御姿をまみへおはしませと云ふ。こゝにて三輪明神女メノ身ミとなりて現じ給ひ。神代のむ
かし物語あり。神樂をかなでまじすることミコト作れり。

(七)

○殺生石

此論は殺生石の古事な世の物語にゆりて作りしものなり。今此出處を掲げんに、海藏寺開山傳に源翁禪師は相州海藏寺の開山なり。諱は心昭。號は空外。姓は源。越前萩村の人なり。康治帝の御宇(近衛)に玉藻の前あり光を身より放

○殺生石

殺生石

次第ツヨク ころろを誘ふ雲水の。く。浮世の旅に出ふよ。是は玄翁といへる道人也。我知識のゆかを立さらす。一大事を歎き一見所をひらき。終に拂子を打ふつて世上に眼をさらす。此程は奥州に候ひしか。都に上り冬夏をも結はばやと思日候 雲水の身はいづくも定なき。く。浮世の旅に迷ひ行ころろのおくを白河の。結びこめたる下野や。那順野の原に着にけり。く。セリフアリシテ女闘なふ其石の邊へな立よらせ給ひそ。そも此石のほこりへよるまじき謂の候か。それは那須野の殺生石にて。人間は申に及ばず。鳥類畜類までもさはるに命なし。かく恐懼き殺生石共。しろしめされて御僧達は。もごめ給へるいのちかな。そこ立のき給へ

つて殿階を照らす。帝ころに於て不豫なり。安部易詭之をトして曰く。是れ玉藻の所爲ふり。忽ちに狐さ化して東國に逃る。帝は三浦介義明。千葉介常胤。上総介廣常に詔して其狐を下野の國那須野にうたしむ。義明射て之を殺す。爾後百年餘に

○殺生石

扱此石は何故かく殺生をは致すやらん。昔鳥羽院の上わらはに。玉藻のまへに申しし人の。執心の石に成たるなり。ふしぎなり。よ玉藻の前は殿上の交りたりし身の。此遠國に魂をこめし事は何ゆゑぞ。謂のあれは社。昔より申ならはすらめ。御身の風情言葉の末。誠をしらぬ事あらし。いや委くはいさしら露の玉藻のまへに。聞き昔は都住居。今魂はあまさがる。鄙に残りて悪念の。なほも顯はす此野邊の。往來の人に。仇を今那須野の原に立石の。く。苔に朽にし跡までも。執心を残しきて又立かへる草の原。物冷じき秋かぜの。ぶくろう松桂の枝に鳴つれ狐。蘭菊の花に隠れすむ。此原の時しも物すごき秋乃夕かな。抑此玉藻

て狐の靈石と
 ふる。世俗に殺
 生石と云ふ。其
 石に觸るべき
 は鳥獸人民皆
 な死す。民の苦
 しむ事甚たし。
 于時僧大徹と
 云ふものあり。
 其石怪を止め
 んと欲すれど
 も能はず。寶治
 帝(後深草)源翁
 と詔して曰く。
 師野州に往き
 て此怪を熄め
 よと。翁到れば。

○殺生石

の前ご申は。出生出世定まらずして。何くの誰ごも白雲の上
 人たりし身なりしに。然れば紅色をこころして。容顏美
 麗なりしかは。御門の叡慮淺からず。有時玉藻の前か
 智慧をはかり給ふに。一事ごごこほるとなし。同キヤウロシヤウワ
 漢の才。詩歌管弦にいたるまで。問に答への暗からず。心
 底くもりなければ。こて玉もの前ごぞ。召れける。或時
 みかごは。清涼殿に御出なり。月郷雲客の堪能なるを召集め。
 管弦の御遊有しに。比は秋の末。月また遅き宵の空の雲のけ
 しき凄ましく。打時雨吹風に。御殿の燈消にけり。雲の上人立
 騒ぎ。松明ごくご進むれば。玉藻の前か身より。光をはなちて
 清涼殿を照しければ。光大内に満ちて。畫圖の屏風萩の戸。闇
 の夜のにしき成しかご。光りにかゝりやきてひごへに月の如

石の左右白骨
 嶮峻山の如く
 積れり。翁は破
 産墮の機縁を
 拈して曰く。汝
 是れ既に石靈
 何れの所より
 か来る性いつ
 くに向うてか
 收まるべき。偶を
 匿して曰く。法
 々塵々。端的底
 本來の面目未
 た曾て隠れず
 現成公案大難
 事異類中行度
 量に任す。柱

○殺生石

く也。上シテ「帝それよりも同御惱ごならせ給ひしかば。安倍の
 やすなりうらなつて。勘状に申様。是は偏に玉もの前か所爲
 なりや。王法を傾けんご。化生して來りたり調伏のまつり有
 へしご。奏すれば忽に。叡慮もかはり引かへて。玉藻化生をも
 ごの身に。那須野の草のつゆご消し跡は是なり。加様
 に委く語給ふ。御身は如何成人やらん。今は何をかつ
 らむへき。其古へは玉ものまへ。今は那須のの殺生石其石
 魂にて候也。實や餘りの悪念は。かへつて善心ご成へし
 然らば衣鉢を授くへし。同くは本躰を。二度顯し給ふへし
 荒はつかしや我姿。ひるは淺間の夕煙の。立かへり夜
 に成て。懺悔の姿あらはさんご。夕闇の夜の空なれご。此
 夜はあかし燈火の我影なりご思し召。恐れ給はて待ち給へ

杖を擧て卓一
下す石忽ち破
碎す其夜一の
女子現して日
く我れ淨戒を
得て天に生る
と。言ひ訖つて
烟の如くに没
す。此より翁の
聲名洛鄙に甚
たし。鎌倉の副
元帥平の時頼
翁の道驗を聞
て。奥州會津利
根川の庄を以
て翁の領粥の
資とす。平時建

○殺生石

石にかくれ失にけりやいしにかくれうせにけり
石ころなしこは申せごも。草木國土悉皆成佛ごきくごき
は。本より佛鉢具足せり。況や衣鉢をさづくるならば。成佛
疑ひ有へからすご。花を手向焼香し。石面にむかつて佛事を
なす。汝元來殺生石ごふせされい。何れの所より來つて。今生
かくの如し。急ぐにされく。自今以後。汝を成佛せしめ。
佛鉢眞如の全身ごなさん。攝取せよ。石に精あり。水に
音あり風は大虚にわたる。像を今そ顯はすいしの。ふたつ
にわるれは石魂忽に。あらはれ出たりおそろしや。野干の像
しぎやな此石二つにわれ。光のうちをよくみれは。野干の像
ご有ながらさもふしぎなる人躰なり。今は何をかつく
むへき。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の后

五世



長年間なり。蓋抄に人王七十六代近衛院の御時。容顔無雙の女人宮中に化來す玉藻前と名くやかて後に成て帝を騰す。時五方博士隨一安部光榮を召て此事を占ひ申せしある。光榮申上るは。安部清明は不思議至極の博士なり。彼れに仰付

褒似と現し。我朝にては鳥羽院の玉もの前とは成たるなり。我王法をかたふけんご。かりに優女の形と成。玉躰にちかつき奉れば御惱となる。既に御命をこらんご悦をなしし所に。安倍の泰成調伏のまつりをはしめ。壇に五色の幣帛をたて玉藻に御幣をもたせつ。感歎をくだき祈りしかは。上同頓て五躰を苦しめて。幣帛をおつ取ごぶ空の。雲井を翔り海山をこえて此野に隠れすむ。其後勅使たつて。三浦の介上總の介兩人に倫旨をなされつ。那須野の化生の者を退治せよこの勅をうけて。野干は犬に似たれば犬にて稽古有へしこて百日犬をそ射たりける是犬追物はじめかや。両介は狩装束にて。数万騎那須野を取こめて草をわかつて狩けるに。身を何と那須野の原に。顯はれ出

殺生石

ちるべしき。依て清明か方へ勅使立て。清明參内して御腦の由を占ひ申せば。狐美女も成て今后に立給ふ。妻の愛あるか故に其崇

しを狩人の。追つまくつさくりにつけて。矢の下に射ぶせられて。即時に命をいたづらに。那須のく原のつゆも消ても猶執心は。此野に残つて。殺生石も成て。人をこる事多年なれども今あひがたき。御法をうけて。此後悪事をいたすこと。有べからずご御僧に。約束かたる石もなつて。やくそくかたき石も成て。鬼神のすがたはうせにけり

あり彼の狐周の幽王の后となりて。褒姒と云ひ。夏の梁王の后となりて。妲己と云ひ。段の周王にては。末嬉と云ひ。皆國々を腦し。今日本に來て玉藻の前と云ふふり。彼の狐を寄に立置き。幣を持たせ。是を祈る。女則ち七色の狐となりて。下野の國那須野の原に飛び去りぬ。時に上總介三浦介。兩介に仰せて。那須野に行て獵す。彼の狐を射んとすれども。あたらず故に伊豆箱根。若宮八幡に祈念す。其夜の夢に兩介に。鏑矢を給はり。百日犬を射習ふべしとある。則ち百日稽古して彼の狐を射さめて上落す。彼の野にて獵しけるやうに。方八町に埒を結び。犬を入れて。騎馬の支度して之を射る。帝御覽ありて。歎慮に備ふ。是れ犬追物のはじめふり。彼の狐殺しける血。那須野の原にこぼれて石となりて。人を腦す。或とき玄

能法師彼の石にむかひ。汝元來の生石と察し給へば。石忽ちに破碎す。とある。是等を木として作れるものあり

〇野宮

六條の御息所は一人の御むすめを持ちて。後家すみし給ふ所に。光源氏の君忍びて通ひおはしぬ。然るに源氏の御室葵の上と申すは左大臣の女にて威勢もつよかりしか。或年加茂の祭見に出でた

野宮

是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて。洛陽の名所舊跡残なく一見仕て候。また秋も末に成候へは。さが野の方床敷候程に。立越一見せば。やご思日候。是成森を人に尋て候へは。野宮の舊跡と。かや申候程に。逆縁ながら一見せば。やご思日候。我此社にきてみれば。黒木の鳥居小柴垣。昔にかはらぬ有様なり。こはそも何といひたる事やらん。よこかゝる時節に。参りあひて。拜み申ぞ有難き。伊勢の神垣隔てなく。法のをしへの道直に。爰に尋て宮所心もすめる。夕かなく。花に馴こし野の宮の。秋より後は

る御息所の車
を。其下人ども
押しやりなごして
散々に耻見せ
たることあり。
かれての嫉妬
心の上はこの
恨みまで添ひ
て。御息所の生
霊は葵上を憐
まし。ついに取
り殺しけるを。
源氏はあまり
の事に覺えて
うさんじ給ひ。
是より御中か
れく。にふり

○野宮

いかならん。折しもあれ物の淋しき秋暮で。猶しほり行
袖の露。身をくだくなる夕間暮。こころの色はをのづから、干
種のはなにうつろひて。衰ふる身の習ひかな。人こそし
らねけふここに昔の跡に立歸り。野の宮の杜のこがら
し秋ふけて。身にしむ色の消かへり。思へは古へを何ぞ
忍ぶの草衣。さてしもあらぬかりの世に。行かへるこそ恨な
れく。我此杜の陰に居て。古へを思日。心をすま
折ふし。いごなまめける女姓一人忽然こ來り給ふは。いか成
人にてましますぞ。いかなる者ぞと問せ給ふ。其方を社こ
ひ參らすべけれ。是は古へ齊宮にたぐせ給ひし人の。仮に移
ります野宮なり。然れども其後は此事たえぬれ共。長月七日
のけふは又。昔を思ふ年々に。人社しらねみや所を清め。御神

しかば。頼み少
ふく思召て。其
頃御姫の齋宮
にたちて伊勢
の國へ下向し
給ふに。御身も
つきそひ行か
んさて先づ野
宮に籠りおほ
すな源氏もさ
すが淺からず
契り給ひし御
中ふれば。御消
息にて度々訪
せ給ふて後。野
の宮に尋れた
まひ。榊の枝な

○野宮

事をなしたむらふところに。行へも知ぬ御事成か。來り給ふ
は憚あり。ごくく歸給へごよ。いやく是は苦しか
らぬ。身の行末も定めなき。世を捨人の數なるべし。扱爰
は古にし跡を今日毎に。むかしを思ひ給ふ。いはれは如
何成事や覽。光源氏此所に詣給ひしは。長月七日の日け
ふに當れり。其時いさゝか持給ひし榊の枝を。いがきの内に
さし置給へは。御息所取あへず。神垣はしるしの杉もなき物
を。如何にまがへてをれる榊ぞ。讀給ひしもけふぞかこ
實おもしろ言の葉の。今持給ふ榊の枝も。春にかはら
ぬ色よなふ。むかしにかはらぬ色ぞこは。榊のみこそき
はの陰の。杜のした道秋暮で。紅葉かつちり。あ
さちが原も。うら枯の草葉にあるく野の宮の。く。跡な

折り持ち。かばらね心を榊の色にまかせて互に歌ふ。みたまひ。終夜日比のうらみ聞え給ひ。また御息所思ひあつめ給ひしつらさもはるる計り語り給へるさ云ふ。此論はこの古所の幽霊顯はれ給ひて。旅僧に物語りし給

○野宮

つかしき爰にしも。其長月の七日の日もけふに廻り來にけり。物はかなしや小柴垣いごかりそめの御住居今も火たき屋のかすかなる。光りは我思ひうちにある色や外に見えつらん。荒淋し宮所あらさびし此みや所。猶々御息所の謂懇に御物語候へ。抑此御息所ご申は桐壺の帝の御弟前傍ご申奉りしか。時めく花の色香迄妹背の心あさからざりしに。會者定離のならひ本よりも。驚くへしや夢の世ご。ほごなくおくれ給ひけり。儲しもあらぬ身の露の。光源氏のわりなくも忍日くゆき通ふ。つらき物には末のなごや覽。また絶くの中なりしに。分入給ふ御ころさすがに思ひ果給はず。はるけき野宮に。いご物哀なりけりや。秋の花皆たごろへて虫の聲もかれ

ふ事を作りたるものにて。即ち旅僧が京都に上りて同所の名所舊跡のこりふく一見し。折から秋も末つかたなれば。嵯峨野の邊また一しほゆかしからんと思ひ。さかのへ立ち越へ。こしこを詠めけるに。ふさ道のほとりに見しありげに見

○野宮

がれに松吹風の響迄も。さびしき道すがら秋のかなしみもはてなし。かくて君茲に。詣させ給ひつゝ情を懸てさまぐの。言葉の露も色々の御心のうちぞ哀なる。其後かつらの御祓。しら木綿懸て河浪の。身はうき草のよるべなき心の水に誘はれて。行へも鈴鹿川八十瀬の波にぬれくず。伊勢まで誰か思はんの。こごのはこそひゆく事もためしなきものを親ご子の。たけの都路におもむきしころこそうらみなりけれ。けにやいはれをきくからに。たぐびごならぬ御氣色其名をなのりたまへや。名のりてもかひなき身ごてはづかしの。もりてや余所に知れまし。よしさらばその名もなき身ご問せ給へや。なまき身ごまげばふしぎやな。さては此世をはかなくも。さりてひささあこの名の地

ゆる。森の木立
ありければ。こ
ころの人に尋
れしに。野の宮
の齋跡まか聞
えけるほごに。
一見せばやこ
て其森に來た
りて見れば。黒
木の鳥居小柴
垣むかしにか
はらぬ有様を
見て。いさかた
じけふく思ひ
つゝ。心をすま
す折ふしに。い
づくさもなく

○野宮

御息所は女 われなりこ下同 夕ぐれの秋の風。杜キの木の間ノの
夕月夜ユヅク。影かすかなるこのしたの。黒木クロキの。鳥井トリイのふたばし
らに立タチかくれて失ウツセにけり跡たちかくれ失ウツセにけりワキ上。かた
敷シゲやもりの木陰コカゲのこけ衣ゴロモ。同じ色なる草クサむしろ。思ひ
をのべてよもすがら。かの御跡ミツトをこふごかや〜
下女後野宮ノの。秋アキの千草チクサの花車ハナクルマ。我もむかしに。廻マり來キにけ
一七イり。野宮ノの。秋アキの千草チクサの花車ハナクルマ。我もむかしに。廻マり來キにけ
ワキ上り。ふしぎやな月の光りも幽カスカなる。車の音ネのちかづ
く方カタを。みればあじろの下簾シタスダレ。思ひかけさる有様なり。如何
様カタガ疑ウタガふ所トコロもなく。御息所ミヨシヨにてましますかさもあれいか成く
るまやらん女詞。いかなる車クルマと問トせ給タマへは。思ひぞ出る其む
かし。賀茂カモのまつりのくるまあらそひ主ヌシは誰タレともしら露ツキの
ワキ上所トコロせき迄マたてならぶる。物見車モノミクルマのさまぐワキ上にここに

野宮



野宮



女性一人、忽然と顯はれければ。旅僧不しんに感じ。そも御身はいかなる人にておはすか。さふ。女こたへて云ふやうはいかなるものぞ。おん身せ給ふ。おん身なこそ問ひまいらすべけれ。是れはいにしへ齋宮にたゝせたまひし人の。假りにうつ

時めく葵の上のウヘ 御車ヲキとて人を拂ハラひ。立さわきたる其中ナカに 女メ 身は小車コクルマのやるかたもなしと答コタへてたてたきたるに 女メ 車の前後ゼンゴに 女メ ばつこよりて 上ウヘ 人とながえにこりつトきつゝ人給ヒトタマひの奥ウラに。おしやられて物見車モノミクルマのちからもなき身のほぞぞ思オモひしられたる。よしや思へば何事ナニコトも。報ウラひの罪によももれじ。身は猶なほうしの小車コクルマの廻マりくきていつまでぞ妄執モウシツをはらし給へや。く 下シモ 昔を思ふ。花の袖 地チ 月にツキこかへす。けしきかな 女メ 野の宮ノミヤの。月もむかしや。おもふらむ 上ウヘ 影さびしくも杜ツツのした露ツルく 下シモ 身の置ツキごころも哀昔アハレの 下シモ 庭ニハのたぐずまひ 下シモ 余所ヨソにぞかはる 女メ けしきもかりなる 女メ 小柴コシバ墻カキ 下シモ 露打ツルヒ拂ハラひ。こはれし我も其人ソノヒトも。唯夢タビユメの世ヨこふり行跡ユクなるにたれ松虫マツムシの音ネは。り

○野宮

ります野の宮
なりしかれど
もその後ちば
このことたえ
ぬれ共。長月七
日の今日は又、

んくごして風茫々たる野宮の夜すがらなつかしや
爰は元來かたじけなくも神風や伊勢のうちこの鳥居
に出入姿は生死の道を神は受すや思ふらんこ。また車にう
ち乗て火宅の門をや出ぬらん火宅のかこ

むかしを思ふ年々に。人こそしられ宮所を清め御神事をなす所に。行末もさだめぬ僧の
身としてこゝに來り給ひしは憚ればさくく歸り給へ。旅僧應ぜず問ふて云ふや
ういやく是はくるしからず。身の行末もさだなき世を捨てびこのことなり。さてく
むかしを忍びたまふ。謂はれはいかなる事やらんこ。これより前段の古ることな女が物
語りして。終にそのいにしへの御息所はわれなりと名のりて。黒木の鳥居の二柱に立ち
かくれてうせければ。旅僧は森の木かげの草むしるに。夜もすがら経をよみ。御息所の御
あさを吊ふ所に。野の宮の秋の千草の花車われもむかしにめぐり來にけり。うち誄じ
つゝ御息所の幽靈あらはれ。いにしへのことさうち語らふことありて。妄執をばらし
火宅の門を出ると云ふこととせり

○野宮

○松虫
此論は攝津の
國阿部野に。松
虫塚といふ古
墳あるに本づ
き。云ひ傳へた
る俗説を布演
して。松むしを
愛せし人の亡
香出で來たり
て。酒を飲み暮
遊むもの語る
こゝを作れる
なり。
爰に阿部野あ
たりに住むも
の。阿部野の市

松虫

是は攝津國阿部野のあたりに住居する者にて候。我此
阿部野の市に出て酒を賣候處に。いづく共知らずわかき男
の數多來り酒をのみ。歸るさには酒宴をなして歸り候何こ
やらん不審に候間。今日も來りて候は。いかなる者ぞと名
を尋ねばやと存候。次第立衆もこの秋をも松むしの。音に
もや友を忍ぶらん。秋の風吹ゆくまゝに長月の有あけさ
むき朝風に。袖ふれつづく市人の。伴ひ出る道の邊の草
葉の露も深みごり。立つれゆくや色くのみのしろ衣日もい
でて。あべの市路に出るなり遠里ながら程近きこや住の江
のうらづたひ。塩風も吹や岸野の秋の草。松も響てお
きつ浪の。聞えて聲く友誘ふ此市びこのかずくに。我も

○松虫

に出で。毎日酒を賣り居る處に。いづくもふく若き男の。數多うち連れ來たりて酒を飲み。酒宴をなして歸り行く有様。何さやらん不思議なれば。今日もまた來たりしかば。いづくのにも。にていかなる人か尋ね見んさて。彼の酒賣る男の待ち

○松 虫

行人もゆく。あべ野のはらは面白やくワキセル上傳聞白樂天が酒功シユウコウ釐リを作りし琴詩酒の友。今にしられて市屋形ヤカタに樽ソンをすへさかづきをならへて。よりくる人を待居マテたり。いかに人々酒召サケノボれ候へシテ我宿は菊キクうる市にあらねども。四方ヨロのかごべに人さわくご。讀ヨミしも故人コジニのこころ成ナルへし。いかに人々面々オモシロに。醜酒ウシウをくみてもてなし給へワキ上また彼人の來れるぞや。けふはいつより酒をたゞへ。遊樂遊舞ユウガクの和歌を詠ユイし。人の心を慰ナグサめ給へ早くな歸り給ひそごよシテ何われを早くなかへりそごやワキ上中ナカの事暮過クシるごも。月をも見捨給ミスツふなよシテおせまでもなし何ごてか。此酒友シユウユウをば見捨ミスツへき。古き詠ユイにも花の下ハナノタにワキ上歸らん事を忘ワスるごはシテ美景ミキヨにシテよるご作りたり二人樽ソンの前マエに醉チイをすくめては。是春コレハルのかぜ

松 虫

松 虫

松虫

松虫



居る折から。恰もいつもの時刻さおぼしき頃。若き男のうち連れて。もとの秋をも松むしの音にもや友を忍ぶらん。さ口づさみつと出で来たれば。酒賣る男待かれ顔に。いかに人々酒召されよ。さ呼ひかければ。若き男の「我宿は菊うる市にあら

ごもいへり下同。今は秋の風。あたゝめ酒の身をしれば。薬クワリきくの花のもごに。歸らん事を忘れいさや御酒を愛せん上同。縦暮トビクるごも。く。夜遊ヨウの友に訓衣ケンイの。袂タビに受たる月影の。うつらふ花のかほばせの。盃サカヅキにむかへば色も猶まさり草クサ。干ツキごせの秋をも限カキらしや。松虫の音も盡ツキじ。いつまぞ草クサのいつ迄ツキも。かはらぬ友こそは買カイえたる市のたからなれく。
「いかに申候。唯今の言葉の末に。松むしの音に友を忍ぶご承候は。いかなる謂イワレにて候そ。シテ詞さん候それに付物語の候。かたつて聞キカせ申候へし。ワキ「さらば御物語候へ。シテ「むかし此阿部野の松原を。或人二人つれて通りしに。折節松虫の聲面白く聞えしかば。一人の友人。彼虫の音をしたひ行ユキしに。今一人の友人。良久ヤトヒサしく待共歸マテドモらざりし程に。心許ココロヨクなく。

れども四方の門邊に人ぞさ
わけるに讀み
しも故人の心
なるべし。如何
に人々面々に。
靈酒を汲みて
もてなし給べ
さ連れのもの
らに物云ふを
酒店の男す
み出て今日ほ
いつより酒を
たへ。遊樂遊
舞の和歌を詠
じ、人の心をふ
ぐさめ給へ。早

○松 虫

思ひ尋行みれば。彼者草路にふして空しくなる。しなば一所
ごこそ思ひしに。こはそも何ごいひたる事ぞこて。なき悲し
めごかひぞなき。其ま。土中に埋れ木の人しれぬ。社
思ひしに。朽もせて松むしのねに友を忍ふ名の世にもれけ
るぞかなしき。今も其友をしのびて松むしの。音に
さそはれて市人の。身をかへてなき跡の亡靈にきたりた
り。愧かしや是迄なり。立すがりたる市人の。ひごがけに紛
れてあへの方に行にけり。世にも。なきかけすこし残しつ。此ほどの友びこのなごり
をしはしごめ給へ。折節秋の暮。松虫もなく物を我を
や待聲ならん。そもこころなきむしの音の。我をまつ聲
ごこは誠しからぬ言葉かな。虫の音も。忍ふ友を

くながへり給
ふなご云ふ。若
き男はいぶか
しげに何に早
くなかへりそ
さ。問ふに答へ
て酒店の男中
の。このこ暮
過ぐるさ。月
を見捨てて歸
り給ふなご云
ひければ。若き
男うぶづきて
仰せまでもな
し何にさして。
この酒友をば
見捨つべきと

○松 虫

ばまてばこそこの葉にもかゝるらめ。實もひ出
したり。古き歌にも秋の野に。人まつむしの聲すなり
上地 我かこゆきて。いざこふらはんごおぼしめすか人。有難
や是ぞまこのの友を。忍ふぞよ松むしの音に。伴ひて歸りけ
り虫の音につれて歸りけり。松風寒き此原の。草の
かりねの。ごこごばに御法をなして夜もすがら。彼あごごふ
ぞ有がたき。荒有難の御吊ひやな。秋露にかる
むしの音きけは。閨浮の秋に歸る心。猶郊原に打残る。魄靈
是迄來りたり。うれしく吊ひたまふものかな。はや
ゆふ影も深みごり。草の花色露深き。其方を見れば人影の。
幽にみゆるは有つる人か。中くなれやもごよりも。
むかしの友を猶忍ふ。虫の音ごもにあらはれて。手向を受る

「花下忘歸因美
景極前勸酒是
春風」古き詠
なご替りく
にうち吟じつ
若き男の一
節舞ふこまあ
り其言葉の折
りく松む
しの音に友を
しのぶこ云ふ
意味聞ぬしを
酒店の男き
さがめて若き
男にうちむか
ひ其辭はれを
問ひければ若

○松虫

草ごろもの 浦は難波のさこもちかき
人訓とて 「ごふらふ人も」 「ごはるゝ我も」
しへ今社 替れこも 古郷に住しはをなじ難波びこ
く 芦火たくやも市屋かたも。かはらぬちぎりを忍ぶ草の
忘れえぬ友ぞかしまらなつかしの心也 忘れて年を経
し物を。また古へに歸る浪の。難波のここのよし芦も實へだ
てなきこもごかや 「あしたに落花を踏であひ伴つて
いづ。夕べには飛鳥にしたがつて一時に歸る 然れば
花鳥遊樂の瓊筵 風月の友に誘れて。春の山邊や秋の野の
草葉にすたく虫までも。きけば心の。友ならずや 一樹
の陰の宿りも他生の縁と聞物を。一河のながれ汲てしる其
心浅からめや、奥山の深谷のしたの菊の水。くめごも汲ごも

き男のこれに
答へてむかし
この松原をあ
る人二人連れ
て通りしに。折
ふし松虫の聲
おもしろく聞
えしかば。一人
の友松むしの
音をしたひ行
きしに。今一人
の友人や久
しく待てごも
歸らさりしほ
さに。心許なく
思ひて尋れゆ
き見れば。彼の

よもつきじ。流水の盃は手先さえぎれる心たり。されは盧山
のいにしへ虎溪をさらぬ室の戸の。其戒を破りしも。志しを
浅からぬ。思ひの露の玉水の景逝を出し道ごかや 夫
は賢きいにしへの。世もたけこころさえて。道ある友人の數
く積喜の餘慶家々に普くひろき道ごかや。今は濁世の人間
ここにつたなき我らにて。心もうつらふや。菊をたへ竹葉
の。世は皆るりさらば我ひこり醒もさで。萬木皆紅葉せり。
只松むしの獨り寝に。友をまち醉をなして。舞かなて遊ばん
千種にすだく。虫の音のはたおる音は 雪を廻らす花の袖
う。きりはたりちよう。つぐりさせてふきりくす蟬脱
色くのいろ音の中に。わきて我このぶ松むしの聲りんく

○松虫

友草露にふし
てむなしくな
る。死なば一所
さまで思ひし
友の。この有様
を見るからに
こはそも何と
云ひたること

○松 虫

りん／＼とこして。夜るのこゑめいくたり
すはや難波
の鐘も明がたの。あさまにも成ぬべしさらばよ友人名残の
そでを。まねく尾花のほのかにみえし。跡絶て。草茫々たる
朝の原の。くさばう／＼たるあしたのはら。むしの音ばかり
や残るらんむしのねばかりやのこるらん

ぞきて。泣き悲しみたれどもそのかひななければ其まゝ土中に埋め人しれぬことそ思
ひしに。松むしの音に友を忍ぶ名の。世にしれけるこそかなしきふりさて。終に群集の中
にまぎれ入り。阿部野のかたへかへりければ。酒店の男も哀れに感じ。松風きむき阿部野
の原に通夜をなし。彼跡吊らひ御法をなして待つ折から。先きの男の幽霊さはれ。あらあ
りがたの御さふらひや。秋霜にかゝるゝ虫の音きけば。闊浮の秋にかへるこゝる。なほ郊
原に朽ちのこる魂靈。これまで来たたりと。酒店の男にむかひ来れば。はや夕影の深み
ざり草の花色つゆふかき。中をかすかに見え来る人は。先きの人にておはすかき。互にか
たり語らふて。更行くまゝの夜さゝもに。遊樂遊舞をかなでる折から。夜もあけがたにな
りければ。名残の袖をうち拂ひ。いづくさもなく消へうせて。草茫々たるあしたの原に。む

しの音ばかり残りし。云ふ作曲ふり
○東岸居士
東岸居士の傳
さ一邇上人縁
起さを比べ讀
まば此作の起
りは知らるべ
し傳に曰く東
岸居士は自然
居士の弟子な
り。名は玄壽字
は東岸。東山雲
居寺の僧なり。
少壯より志を
願宗に留む。參
禪を以て業と
なす。僧衣を被

東岸居士

「是は遠國方の者にて候。我此程は都に上り。かなたこな
たを一見仕りて候。又今日は清水寺へ參らばやご存候
一セイシテ」松をさへ。皆櫻木に染なして。花に聲ある。嵐かな
「是は承及たる東岸居士にてわたり候か。扱今日はいか
様なる聽聞の御座候ぞ」
聞といつば。萬事は皆目前の境界なれば。柳はみどり花は紅。
あら面白のはるの氣色やな。荒面白の答へや候。扱此橋
はいかなる人のかけ給ひたる橋にて候ぞ。是は先師自
然居士の。法界無縁の功力を以て。わたし給ひし橋なれば。
今又か様にすゝむるなり。諸々東岸西岸居士の。郷里

○東岸居士

す高座に登て
説法す。或は羯
鼓を撃て踊躍
し或は扇を執
て舞ふ。人語つ
て剃髪せず細
衣を着ざる故
を問へば。卒然
として曰く。從
來の住所もな
ければ出家の
謂はれなし。出
家にあらず。れ
ば僧衣を被す。
髪は長く乱る
れども侍自ら
道に入る。東岸

○東岸居士

はいづくいかなる人の。父母をはなれし御出家そや。つかしの事を問給ふや。本來きたる所もなければ。出家いふへき謂もなし。出家にあらねは髪をもそらず。衣を墨に染もせて。たぐおのづから道に入て。進まず。智をすてても。愚ならず。折にふれ。進む。ここにわたりて白川に。かゝれるはしは。二人。東の。東岸西岸の柳の。かみはながく乱るゝとも。南枝北枝の梅の花。ひらくる法の一筋に。わたらん爲の橋なれば。進めに入つゝ。彼岸にいたり給へや。又いつもの如く。諷ふて御聞せ候へ。實々是も狂言綺語を以て。讚佛轉法輪の眞の道にもいるなれば。いざやうたはん是。逆も御法の舟のみなれ棹。みのりの船のみなれさを。皆かの岸に至ら

東岸居士



陸
明

の柳を以て帯
と爲して和解
の塵を拂ふと。
問ふもの口を
銜んで言はず。
弘安六年癸未
夏寂す。是に
て東岸居士の
人となりを知
るべし。
一邇上人縁起
に曰く、或人法
文尋れ申しけ
るに、書きて遺
されける。聖の
法語に曰く、春
過ぎ秋來れど

ん シテ上面白や。是も胡蝶の夢のうち 地遊ひたはふれ。舞
ごかや シテ上鈔にまたまうさく。あらゆるごころの佛法の趣
き。箇々緑生の道すぐに今にたえせぬ跡ごかや シテ上但正
像すてにくれて。末法に生を受たり。かるがゆえに春過秋き
たれごも。進みかたきは出離の道 シテ上花を惜み月を見て
も。起り安きは妄念なり。罪障の山にはいつこなく。煩惱の
雲あつうして佛日の光り晴難く シテ上生死の海にはごこし
なへに。無明の波荒くして眞如の月宿らす。生をうくるに任
せて。苦にくるしみを受かさね。死にかへるにしたがつて。
闇きよりのくらきに趣く。六道のちまたには。迷はぬ所もなく。
生死の扉には宿らぬ栖もなし。生死の轉變をば。夢ごやいは
む。又うつごやせんこれらありご。いはんごすれば。雲ご

も進みがたき
は出離の道。花
を惜しみ月を
詠めても起り
やすきは輪廻
の妄念なり。罪
障の山にばい
つさふく煩悩
の雲厚くして
佛日の光り眼
に遮らす。生死
の海にはさこ
しなへに無常
の風烈しくし
て眞如の月や
ざるこさなし。
生を受るにし

○東岸居士

のほり煙を消て後其跡をこくむべくもなし。なしこいはん
ごすれは又恩愛の中。こころごままつて腸をたち魂をうご
かさずご云事なし。彼芝蘭の契りの袂には。かばねをは愁歎
のほのほにこがせごも。紅蓮大紅蓮の氷をは終にこかす事
なし。鴛鴦のふすまの下に眼をは。慈悲の涙にうるほせ共焦
熱大。焦熱の焰をは。終にしめす事なし。かゝるつたなき身
を持つて。上シテ「殺生偷盜邪淫は。身において作る罪なり。妄語
綺語。悪口兩舌はくちにて作る罪也。貪欲瞋恚愚癡は又。心
において絶せず御法の船のみなれ棹。皆かのさしに至らん
ラキカール」
「迎の事に鞆鼓をうつて御見せ候へ」
面白や松ふく
風さつくとこして。浪の聲はうくとたり
所は名に
れふ洛陽の。詠もちかき白何の
浪の鼓や風のさくら

たがつて。苦に
苦を重れ。死に
歸るにしたが
つて開きより
開きに赴く。六
道の街には迷
はぬ所なく。四
生のさぼそに
は宿らぬ住家
もなし。生死の
轉變をば夢と
や言ん現とや
いはん。是を有
さいはんさす
れば雲を登り
煙を消えてむ
なしき空にか

○東岸居士

ラキカール
「うちつれゆくや橋の上」
男女の往來
「貴賤上
下の」
袖をつらねて玉きぬの。さるく沈み浮波の。さ
くら八撥うちつれて
百千ごり
百千鳥轉る春は
ものごこに
「あらたまれごも。我ぞふりゆく」
行は
白川
「行くはしら川の。橋をへだてごむかひは」
東
岸
「こなたは」
西岸
「さごなみは」
「さくら
うつなみは」
つごみ
いづれもいづれも極樂の歌舞
の菩薩の御法ごはさくはしらさや旅人よたび人よあらおも
しろや
あふ南無三寶
實太鼓も鞆鼓もふえひちり
き。弦管ごもに極樂の菩薩のあそびご聞ものを
たごなにごたご雪やこほりごへだつらん。萬法皆一如なる
實相のかごにいらふよく

げをさごむる人なし。無さ言んさすれば又恩愛離別の歌き。心の内にさごまりて腸をたち。魂を迷はさずさ云ふ事ふし。彼の芝蘭の契りの袂に屍をば慈悲の燭にこがせ共。紅蓮大紅蓮の水は解ることあるべからず。鶯鶯の釜の下に眼をば慈悲の涙にうるほせども。焦熱大焦熱の酸はしめる事ふかるべし。徒に歎き徒に悲しみて人も迷ひ我も迷はんよ。りは。早く三界苦輪の里を出て。程なく丸品蓮臺の都に詣づべし。爰に苦惱の婆娑はたやすく離れがたく。無爲の境界は等閑にして至る事を得ず。たましく本願の強縁にあへる時。急ぎはげますしては何れの生をか期すべき。他力の稱名は不思議の一行なり。彌陀超世の本願は凡夫出離の要道なり。身を忘れて信樂し。聲に任せて唱ふべし。是れにて文句の出處を辨ふべし。偕てこの諸の仕組は。遠國方のものに都により。かなたこなたを一見し。清水寺に参詣せし所。爰にてかれく承り及ぶ東岸居士に出會ひてうちかたらひ。後ち羯鼓をうつて舞ひなご爲すこまごせり

○松尾

○松尾

このうたひは松の尾明神の神徳を述べたるものにして。時の帝に仕ふる

松尾

四方の山かせ静にて。く梢の秋ぞ久しき。抑是は當今に仕へ奉る臣下也。扱も西山松尾の明神は。靈神にて御座候へども。朝に隙なき身なれば。いまだ参詣申さず候間。此

る臣下が平素松の尾明神の靈神なるを聞き及び居りて。一度は参拜せんさ心に念じ居れども。朝庭のつさめにひまを得ず。年月を送り居りし所に。やうやく寸隙を得て君に御いさまを願ひたてまつり。松尾明神に参詣せんさて千代のふる道

○松尾

度君に御暇を申。唯今松尾の明神に参詣仕候。嗟峨の山御幸絶にし芹川の。く。千代のふる道跡ふりて。行へだくしき天雲の大炊の入江霧こめて。うへは嵐のやまかぜの。聲も通ひて松の尾の。神の宮るに着にけり。く。秋風一セイ二人の。く。吹きそへて松のをの。神さびわたる。けしきかな。有難や和光同塵の齋垣のうちには。年をむかへて般若の眞文を講じ。又利生方便の社の前には。日を逐て如在の靈殿を仰く。神明の納受疑ひなく。接取の願望れの。く。成就圓滿の靈地。今にはじめぬ神拜なれども。寔に貴き。社内かな。下歌 時しも今は長月の紅葉も四方の氣色にて。春見しは花の都の雲霞。く。たつや日數もうつり來て。今ぞ時なる秋の空曇らぬ月の都路に。往來も繁き諸人の。秋ゆたかなる

こゝろかしこゝろ
ちふがめつと
いつまなく神
の宮居に着き。
こゝろしづか
に参拜せんぞ。
まづ道のほこ
りに休らふ處
に。秋風のこゑ
吹きそへて松
の尾の神さび
わたるけしき
かなき。うち詠
じつと老若二
人の男出でき
たる。官人まづ
その老人に向

○松尾

こゝろかなく
いかに是なる老人に尋ねべき事の候
シテ調 老人は此方の事にて候か。先御姿を見奉れば。此あた
りにては見馴申さぬ御事也。都よりの御参詣にて御座候か
ワキ「實能見て有もの哉。都より始て當社参詣の者也。山のす
がたかんだちの面白さに詠居て候。當社の御謂委く申候へ
シテ「さん候此山林は。皆神の御敷地なり。誠に御代千秋の君
が住。都は間近き神前にて
ツレ上カ、ル
むかふ海津の秋の葉は
河水に浮ふ綾にしき
シテ調 織かく雲も小倉山。時雨る頃
の朝なく
ワキ「昨日は薄きもみぢ葉の
染の色深き
ワキ「にし紅の峯續き
シテ「さながら四方の
錦なれども
下調 松尾の山は梢の秋ならで。唯時雨
のみ年ふるや。霜の後。雪の冬木に成までも。時しらぬ常盤

ひ。如何にたづ
ねたき事有と
云ふ。老人これ
に應じて曰く
何ごさなるや
と官人を見て。
まづ御姿を見
たてまつるに。
このあたり
は見なれもう
さぬ御こさな
り。さだめて都
より御参詣の
かたならん。官
人曰くげによ
くも見てある
ものかな。いか

○松尾

木の。幾久し神松の。落葉ばかりは塵の世に。交る誓ひ頼も
しやく
夫天は陽を以て徳とし。地は陰を以て。用こ
す
然れば神は人天百王の守護神として。本地寂光の
都をいで給ひ。此閻浮提に示現し。五衰の睡りを無上正覺の
月にさまし
シテ下 國土豊かに民あつかれど。安全を守りお
はします
ワキ 和光同塵は。結縁の御はしめ。八相成道は利物
の終を見する御誓ひ。實目前にあらたなり。佛は又常住不滅
の相を顯はし。有無中道を離れて。人を濟度の方便是もつて
同し悲願なき。神といひ佛といひ只是。水波の隔にて。本地
垂跡ごあらはれ三世了達の智慧を以て。現當二世迄の道を
照し給へり。されはにや此社。いつくも云ながら。殊に處
も九重の。雲るの西の山の端を。照すや光りも夕月の。空浮

にもみやこよ
りはじめて當
社參詣の爲め
まいりたるも
のふるが。この
山の妻また神
社建造の模様。
いさも目出度
こころ感じ。そ
ぞるにうちな
かめ居りしふ
り。れがわくは
當社のいはれ
を。委しくかた
りてきかせた
まへさ乞ひせ
れば。老人曰く

○松尾

て嵐山の。峯には實相の聲みちて。聞法の便のみ。大井の波
の音迄も。常樂我淨の結縁をなす心也。梅津かつらの
色々に。日も蘊指紫野。北野平野や鴨貴布禰。祇園林の秋
の風稻荷の山のもみちばの。青かりし惠も様々に。誓ひの色
は替れ共。此神は分て世の月常住の地をしめ王城を守る神
徳の。久しき國に跡垂て。慈尊三會の曉を松尾の神垣かはら
ぬ色そ久しき。實や誓の秋久に。代々を守りの
御神徳猶行末は頼もしき。時しもけふの御神拜有難
し共ゆふしての。神の夜神樂面に。神をすくしめ申さん
上詞 扱は時しも夜神樂の。聲も普き數々に。すはや照
そふ夕月の。庭燎のひかり。柳葉を。うごふ處女
の袖はえて。花の裳裾も色々に。紅葉をかさし松の尾の神の

松尾



睦

六

この見え渡る
山林はみなこ
の神の御敷地
なり。まことに
御代千秋の君
が住む。みやこ
に間ちかき神
前にて。むかふ
梅津の秋の葉
は。河水にうか
ぶ。綾にしき。織
かく雲も小倉
山。しぐる。こ
ろの朝々に。き
のふは。うすき
もみちばの。今
日は。濃染めの

告ツゲを都人夜神樂を拜ヲガみ給へこよ。く。實ロキ上今こても神
の代の。く。誓は盡ツキぬこしるこして。神と君との御恵み。誠也
けりありかたやく。後後シテ上ソレセシユ。夫千秋の松が枝には。萬歳マンゼイの縁
常盤ニギハにて。御代を守りの御影山ミカゲヤマ。きみ安全に民さかえ。五口ゴコ
の風も枝をならさぬ。松の尾の神カミは我事なり。上上同同。八處女
の。袖もかさしの玉かつら。掛カケて祈イノるたま松の光りも
ちるや露も白ぬひの鈴スズも颯ササくの。舞の袂タビはおもしろや
上上同同。秋の夜神樂聲澄シヤレて。く。神さびわたる深更シムカウの朱アカのひ
かりは有かたや。庭燎シヤレヒの影も明アらけき。柳葉ヤナハ颯ササふ妙文
の。こや松尾の神風カミカゼ更行秋は惜アハまる。上上同同。實惜アハむへしく。
今宵コノヨの時も逢アいにあふ。月シヤのひかりも照アそふや。同同同。朱アカの玉
垣ガキ。玉シヤのこびら。同同同。さしひく袖の露かけて。光も散チル也小

○松尾

いるふかき。に
しくれふいの
峯つゞき。さな

○女郎花
忌衣立舞花も白妙の。雪を廻らし千早振。神そ久しきまつ
のをの、たのつかから長き夜の。神樂そめてたかりける。

がら四方のにしきなれと。三人こもく。かはりくり。に。神の奇特御代の榮をうたひか
たらひ。ふほ天は陽をもつて徳とし。地は陰をもつて用さす。しかれば神は人天百王の守
護神とし。本地寂光の都を出でたまひ。この闍浮提に示現し。五衰のねむりを無上正覺の
月にさまし。國土ゆたかに民あつかれと。安全を守りおはします。うたひつまつして
神樂を拜みなほ神の夜のつけをもまらたまへと。老若二人の男うち連れて。かきけす
ごさくうせにけり。官人がくる奇特にあふて。ますく。神樂のありがたきに感じ。實に今
さても神の代の。誓ひはつきぬし。して。神さ君との御めぐみを。仰かんものさ待つ折
から。夫れ千秋の松が枝には。萬歳のみどり常盤にて。御代を守りの御影山。君あんに民
さかへて。五日の風も技をならさず。松の尾の明神さは我がこさなりと。神跡こくに現
じたまへば。官人いよく。ありがたくこころをしづめうやまひて。ふほ神わざを拜みま
つれば。神はそれより神慮をこらし。夜神樂をかゝるで舞ひたまふと云ふこゝに作れり

○女郎花

山城の國男山
の女郎花は。歌

女郎花

是は九州松浦方より出たる僧にて候。我未都を見す候

にもよみし名
草なりと土俗
いひつたふ。む
かし八幡山に
小野頼風とい
へる人あり。容
儀うるはしく
情ふかき者に
てありしが。或
官女に契をこ
め浅からぬ中
にて。毎夜八幡
よりはるく
と官女の許へ
かよひける。頼
風所用ありて
一月あまり來

程に。此秋思ひ立都に上り候。住馴し松浦の里を立出て、
く。末しらぬひの筑紫がたいつしか跡に遠ざかる。旅の道
こそ遙なれ。急候程に。これは早津の國山崎こかや申
候。又向ひに拜まれさせ給ふは。石清水八幡宮にて御入候。
わが國の宇佐の宮と御一躰にて候程に。参らばやと思ひ候。
又是なる野へに女郎花の今を盛と咲みだれて候。立より詠
はやと思ひ候。扱も男山麓の野べに來てみれば。千
種の花さかんにして。色をかざり露を含んで。虫の音迄も心
有がほなり。野草花ををびて蜀錦をつらね。桂林雨を拂つて
松風をしらふ。此男山の女郎花は。古歌にもよまれたる名草
也。是もひこつは家土産なれば。花一本を手折んこ。此女郎
花の邊に立よれば。なふ其花な折給ひそ。花の色はむ

○女郎花

たりざりしな
女ごころのは
かなさは外に
かよふ方あり
て。我方のうさ
くなりしもの
ぞご心得、夫に
捨られたる我
身なれば。世に
ながらへて其
せんふし。一た
び僧老同穴の
ちざりをこめ
しうへは。夫こ
そつれぶくて
忘るさも。貞女
の道をそむき

○女耶花

せる粟のごとし。俗呼つて女郎とす。戯に名をきいてだに借
老を契るご云り。ましてや是は男山。名を得てさける女郎花
の。多かる花に取分て。なご情なく手折給ふ。荒心な旅人
やな。扱御身は如何成人にてましませは。是程咲みだ
れたるをみなへしをは惜み給ふぞ。をしみ申社ごこわ
りなれ。此野への花守にて候。縦花守にてもましませ。
御覽候へ。出家の身なれば。佛に手向ご思召一本御免し候へ
かし。實く出家の御身なれば。佛に手向ご思ふべけれご。
彼菅原の神木にも。をらでたむけよ。其外古き歌にも折ごら
ばたぶさにけがるたてながら。三世の佛に花奉るなご候
へは。殊更出家の御身にこそ。猶ほしもをしみ申すべけれ
左様にふるき歌をひかは。何ごて僧正邊昭は。なにも

て異男に嫁せ
んこころざし
もなし。たゞ死
して我志をあ
らはさんごて
も死ぬる身な
ればせめては
夫の家近き川
に身をなげ。水
底の鱗魚とな
りて。夫のかけ
を見て思ひ出
にせんご。八幡
山へたざり行
ぎ。放生川へ身
を投げらる。願
風かくさきく

○女耶花

でをれる計ぞ女郎花ごはよみ給ひけるぞ。いやされ
ば社我をちにきご人に語るなご。深くしのぶのすり衣の。女
郎ご契る草の枕を。並し迄は。うたがひなければ。其御覽へを
ひき給はく。出家の身にては御誤り。か様にきけは
戯ながら。色香にめづる花ごころ。ごかく申によしごなき。
暇申て歸るごて。本きし道に行過る。あふ譁しくも所
の古歌をはしろしめしたり。女郎花うしご見つごて行過る。
男山にしたてりご思へは。やさしの旅人や。花は主ある
女郎花。よし知人の名にめて。ゆるし申也一本をらせ給へ
や。なまめき立る女郎花。うしろめたくや思覧。女
郎ごかける花の名に誰借老を契りけん。彼邯鄲のかりまく
ら。夢は五十の哀よのためしも誠なるべしや。此

よりも胸うち
さはぎ。もしや
我妻にてやあ
るらんぞ。いそ
ぎかしこに行
きて見るに。ほ
や息たへて空
しき死骸ぞあ
がりける。頼風
やがて其ほま
りに塚をきつ
き。供佛施僧の
いさまみ念こ
るにさりおこ
なひしに。一夜
の中此塚よ
り女郎花生ひ

○女郎花

野への女郎花に詠入て。未八幡宮に参らず候。此厨こ
そ唯今山上する者にて候へ。八幡への御道知へ申候へし此
方へ御入候へ。聞しにこえて貴く有難かりける靈
地かな。山下の人家軒をならべ。和光の塵も濁江の。
河水に浮ふうろくづは。實も生るをはなつかご。深き誓ひも
あらたにて。恵みぞしげき男山。榮行みちの有難さよ。比
は八月なかばの日。神の御幸なる御旅所をふし拜み。上同
かたの月のかつらの男山。く。さやけき影は所から。紅葉
も照添て日もかげろふのいはし水。苔の衣も妙なれや。三つ
の袂にかけうつる。しるしの箱を納むなる。法の神宮寺有が
たかりし靈地かな。岩松そばだつて。山そびえ谷回りて諸
木えだをつらねたり。鳩の嶺こし來てみれば。三千世界もよ

いでたり。頼風
見るよりも女
の執心この花
になりけるよ
さ。花の色もな
つかしく立よ
れば。女郎花う
らみたるけし
きにて風もふ
かぬになびき
のき。いく度よ
りてもかくの
ごさし。頼風い
よいよかなし
く。同じ川へ身
を投げける。愛
着執心ふかき

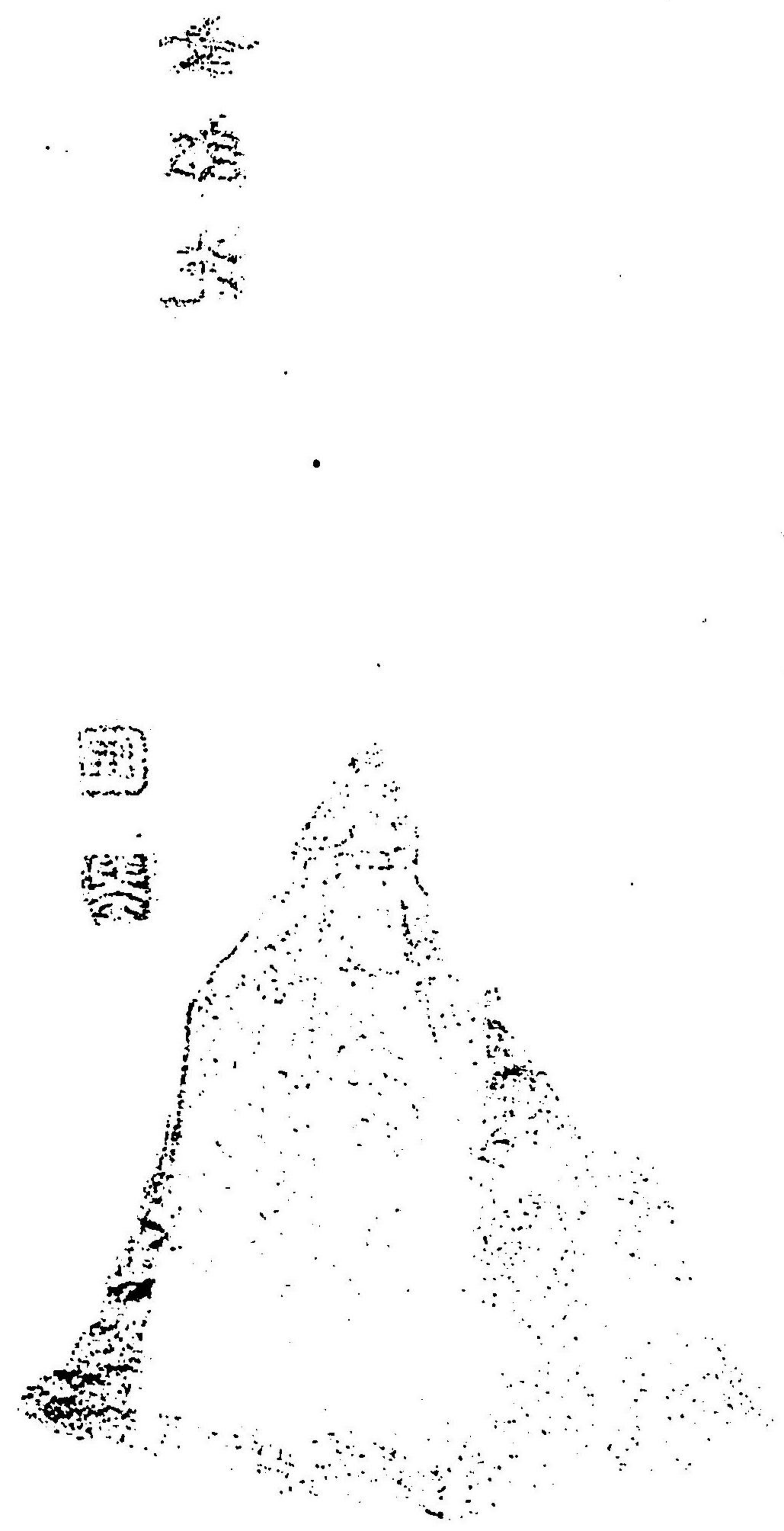
○女郎花

そならず千里も同じ月の夜の。あけの玉垣みごころの。錦か
けまくもかたむけなしごふしおがむ。是社石清水八幡
宮にて御入候へ。能く御拜み候へ。ばや日の暮て候へは御い
ごま申候へし。なふく。女郎花ご申事は此男山に付た
る謂にて候か。荒何共なや。さきに女郎花の古歌を引て
戯を申て候も徒事にて候。女郎花ご申事は。此男山に付たる
謂にて候へ。又此山陰に男塚女塚さて候を見せ申候へし。こ
なたへ御入候へ。是成は男塚。又こなたなるは女塚。この男
塚女塚について。女郎花の謂の候。是は夫婦の人の土中にて
候。扱其夫婦の人の國はいづく。名字はいかなる者ごや
覽。女は都の人。男は此八幡山に。小野頼風ご申し人。は
つかしやいにしへを。語るにもさすがなり。申さねば又なき

さぎはかくの
ごさくのこま
にや。唐土にも
韓朋といへる
人の妻。美色天
下にならぶも
のなし。帝傾國
の色なきこし
めし。後宮へ入
れて寵愛した
まふ。韓朋これ
をいきごなり
怨言やまざり
しかば。帝逆鱗
あつてごさに
よせ韓朋を殺
したまふ。この

○女耶花

跡をたれか稀にも吊ひの便りを思ひよりかぜの更行月にこ
がれて夢の如くに失にけりく
かの草く陰よりみえし亡魂を。こふらふ法の聲立て。南
無幽靈出離生死頓證菩提
骸を争ふ猛獸は。禁するにあたはず
なつかじや。きけばむかしの秋の風
かへらばつれよ。妹背の波
消にしたまのをみな
へし。花の夫婦は顯れたり。荒有難の御法やな
のごさくに亡魂の。顯れ給ふふしきさよ
住し者。彼頼風に契りをこめしに
少契りのさわりあ
る。人まを誠と思ひけるか
女心のはがなさは。都を獨
りあくがれ出て。猶も恨みの思ひ深き。放生川に身を投る



女耶花

山

女郎花



睦
翠

妻夫の非命を
なげきあるこ
き盛より落て
死にけり。帯の
端に我屍を韓
期さ一所にう
づめたまはれ
と書きけり。帝
いよくいかに
りたまひ別の
所にうづめさ
せたまふ。二つ
の塚より一夜
に梓生じ根は
下に交はり。枝
は上に連らな
る。これを連理

シテイロヨリカセコレ
頼風是をきく付て。驚き騒ぎ行みれば。あえなき死骸
計なり。女。なくく死骸を取上て。此山本の土中にこめし
に。其墳より女郎花一本生出たり。頼風心に思ふ様。扱
は我妻の。をみなへしに成けるよご。なほ花色もなつかしく。
草のたもこも我袖も。露ふれ染て立よれば。此花うらみたる
けしきにて。夫のよれば靡きのき又立のけばもこのごこし
下同。爰によつて貫之も。男山のむかしを思つて女郎花の一時
を。くねるご書し水莖の跡の世までもなつかしや。頼風
其時に。彼哀さを思ひこり。むざんやな我故に。よしなき水
の泡ご消ていたつらなる身ごなるも。ひこへに我科ぞがし。
しかし浮世にすまぬ迄ご同じ道にならんごて。上シテ「つごい
て此河に身を投て。ごもに土中にこめしより女塚に對して

○女郎花



の契り云ふ。この外望、夫石虎が石等皆執念のなすこころなり。此謠もこれらの傳説にもさづきて作れるものにして。即ち九州松浦がたより出たる旅僧が。未だ都を見ざれば。秋の日思ひ立て。我住みなれし松浦の里をたち出で。未しらぬひの筑紫がたをあたりに。旅の宿りをかされて津の國の山崎につき。石清水八幡宮に參詣せん。さてまづこころかしこのけしきのいせめづらかに思ひつらうち詠めけるに。その野邊に女郎花の。今をさかりと咲きみだれて。あたりの千種の花もまた色をかざり。露をふくんで虫の音までもこころありげにすだくありさま。蜀錦をつらね松風をしらふるに。こころならず。旅僧心に思ふやう。この男山の女郎花は。古歌にも詠れたる名草なれば。一も手折りて家土産にせんもの。女郎花の邊りに立ちよる折から。その花折らせ給ひそと。呼びかけながら老人の出て來りてこれをぞいめければ。旅僧も不審に思ひ。是ほどに咲きみだれる女郎花の。花一もさを折れば。さて。さて。名所のさばりともなるまじきに。手折らんことを惜しまる。は。い。さ。ふ。し。ぎ。なる。こ。も。思。ふ。て。其。い。は。れ。を。尋。ね。け。る。を。老。人。答。へ。て。我。は。こ。の。野。の。花。守。ふ。り。と。て。そ。の。折。る。べ。か。ら。さ。る。こ。も。問。答。へ。な。ご。し。つ。終。に。旅。僧。に。女。郎。花。一。も。さ。手。折。ら。ん。こ。を。許。し。夫。れ。よ。り。八。幡。宮。の。道。し。る。べ。し。て。八。幡。宮。に。參。拜。し。こ。の。山。に。あ。る。男。塚。女。塚。の。謂。は。れ。を。物。語。り。後。む。か。し。の。頼。風。と。そ。の。契。り。あ。さ。か。ら。ざ。り。し。女。の。幽。靈。あ。ら。は。れ。出。で。し。旅。僧。に。懺。悔。の。も。の。が。た。り。を。な。し。二。人。り。が。あ。さ。の。吊。ら。ひ。を。た。の。む。と。云。ふ。事。に。せ。り。

○葛城

葛城山は大和の國に屬し。本朝七高山の其一にして。常に山伏の峯入を爲すところなり。

○女郎花

又男山に申也其墳はこれ主は我まぼろしながら來りたり。跡吊ひてたび給へ。あら闇浮戀しや。邪嬖の悪鬼は身を責て。其念力の道もさがしきつるぎの山の上。に戀しき人は見えたり。嬉しやとて。行上れば。つるぎは身を通し磐石は骨をくだく。こはそもいかにをそろしや。つるぎのえだのたはむまで。いか成罪のなれる果ぞやよしなかりける。花の一時をくねるも夢ぞ女郎花。露のうてなや花の縁に。うかべてたび給へ罪を浮めてたび給へ。

に思ふやう。この男山の女郎花は。古歌にも詠れたる名草なれば。一も手折りて家土産にせんもの。女郎花の邊りに立ちよる折から。その花折らせ給ひそと。呼びかけながら老人の出て來りてこれをぞいめければ。旅僧も不審に思ひ。是ほどに咲きみだれる女郎花の。花一もさを折れば。さて。さて。名所のさばりともなるまじきに。手折らんことを惜しまる。は。い。さ。ふ。し。ぎ。なる。こ。も。思。ふ。て。其。い。は。れ。を。尋。ね。け。る。を。老。人。答。へ。て。我。は。こ。の。野。の。花。守。ふ。り。と。て。そ。の。折。る。べ。か。ら。さ。る。こ。も。問。答。へ。な。ご。し。つ。終。に。旅。僧。に。女。郎。花。一。も。さ。手。折。ら。ん。こ。を。許。し。夫。れ。よ。り。八。幡。宮。の。道。し。る。べ。し。て。八。幡。宮。に。參。拜。し。こ。の。山。に。あ。る。男。塚。女。塚。の。謂。は。れ。を。物。語。り。後。む。か。し。の。頼。風。と。そ。の。契。り。あ。さ。か。ら。ざ。り。し。女。の。幽。靈。あ。ら。は。れ。出。で。し。旅。僧。に。懺。悔。の。も。の。が。た。り。を。な。し。二。人。り。が。あ。さ。の。吊。ら。ひ。を。た。の。む。と。云。ふ。事。に。せ。り。

葛城

次第ツヨク神のむかしの跡ごめて。葛城山に參らむ。是は出羽の羽黒山より出たる山伏にて候。我此度大峯かつらきに入はやく存候。篠懸の袖の朝霜起ふしの。岩ねの枕。

○葛城

り。さればこの
話もかつらぎ
山に登山する
山伏を借りて
葛城の神の化
身ふる里の女
が。この山伏に
一夜の宿をが
して身の上の
むがし物語を
起す縁さはな
したるならん
爰に出羽の國
羽黒山より出
たる山伏が。葛
城山に峯入せ
んとあす途中

○葛城
松がねの。宿りも繁きみねつぐき山又山を分越て。行は程な
く大和路や。かつらきやまに着にけりく。急候間。程
なく葛城山に着て候。荒咲止や。また雪の降來りて候ぞや。是
成木陰に立寄ばや。存候。なふくあれなる山伏は
何かたへ御通候ぞ。此方の事にて候か。御身はいかなる
人やらん。是は此葛城山に住女にてさむらふ。柴さる道
の歸るさに。踏馴たるかよひ路をさへ。雪のふどきにかき暗
て。家路も定かにわきまへぬに。ましてやしらぬ旅人の。末い
づくにか雪の山路に。迷ひ給ふは痛はしや。見苦しく候へ共
童が庵にて一夜を御明し候へ。嬉しくも仰候もの哉。今
に始めぬ此山の度々峯入して。通ひ馴たる山路なれども。今
の吹雪に前後を忘して候に。御志有難う候。さて御宿りは何

にて。吹雪のた
めに前後を忘
じ。道の邊の木
陰に休み雪の
晴れ間を待つ
處に。通りしか
かりし里の女
に伴ふはれて
其女の宿に泊
す。此夜雪ふり
寒さもひとし
ほなれば主の
女。先きに買ひ
持て來し柴さ
り出だし。是
ふる標を火に
焚きてあて申

○葛城
處そや。此岨づたひをあなたなる。谷のした庵見苦し
くごも。程ふる雪の晴間まで。御身を休め給ふへし。
らば御供申さんご。夕の山の常影より。さらでも嶮しき
岨傳ひを。道知へする山人の。笠は重し吳山の雪。脊
は香ばし楚地の花。肩上の笠には。無影の月を傾け。
擔頭の柴には不香の花を手折つ。歸る姿や山人の。笠も薪
も埋れて。雪社くたれ谷の道をたどり。歸り來て柴の庵
に着にけりく。暫御休み候ひて。御篠懸をほされう
ずるにて候。心得申候。餘りに夜寒に候程に。是成標
を解みだし。火に焚てあて參らせ候へし。荒面白や標ご。
は。此木の名にて候か。うたてやな此葛城山の雪の中に。
結集たる木々の梢を。しもごご知し召れぬは。御心なき様に

さんご云ふ。山
伏其標と云ふ
は木の名なる
やと問ふ。女答
へてこの標と
云ふは此葛
城山の雪の中
に結びあつめ
たる木々の梢
の事にて即ち
古歌に
しもさゆふ
かつらぎ山
にふる雪は
間ふくさき
なくおもほ
ゆるかな

○葛城

こそ候へ ワキ上カ 荒面白や扱は此。標といふ木はかつらぎ
山に。由緒ある木にて候よなふ シテ詞 申にや及ぶ古き歌の
言葉ぞかし。標を結たる葛なるを。此葛城山の名によせたり。
是大和舞のうたごいへり ワキ上カ 實に古き大和舞の歌の
むかしの思ひ出の シテ 折から雪も 二人 ふる物を 上同 しも
こゆふ葛城山に降雪はく。間無時なく。おもほゆるかなご
よむうたの。言の葉そへて大和舞の袖の雪もふるき世の。余
所にのみみし白雲や高間山のみねの柴屋の夕煙まつが枝そ
へて焚ふよく。かつらぎや木の間にも光る稲妻は。山伏のう
つ。火かご社みれ。實やよの中は電光朝露いしの火のひかり
の間ぞご思へたご。我身の歎をも取添て思ひまじばを焚う
よ シテ上 捨人の。苔の衣のいろ深く 同 法に心は墨染の。袖

さあるうたの
言葉にて。しも
とを結ひたる
かつらなるを
この葛城山の
名に寄せたり
さ。其謂れを物
語る折から山
伏達もさきに
吹雪のため
うちぬらした
る篠懸なごも
乾したればさ
て。これより後
夜の勤をささ
んと云ひける
な。主の女これ

○葛城

もさながら白妙の雪にやいろを蘇民かくたの。篠懸も汗ま
さるしもごを聚め柴を焚寒風を防ぐ葛城の。山ぶしの名に
し負。かた敷袖のまくらして。身を休め給へや御身を休め給
へや ワキ詞 荒嬉しや篠懸をほして候ぞや。急き後夜の勤を
始ばやご思ひ候 シテ詞 御勤ごは有難や。我に脳める心あり。
御勤の序に祈加持して給はり候へ ワキ こそ御身に脳む事
有ごは。何ご云たる事や覽 シテ さなきだに女は五障の罪ふ
かきに。法の咎の咒詛をおひ。此山の名にしおふ。葛かつらに
て身をいましめて。猶三熱の苦しみあり。此身をたすけてた
ひ給へ ワキ上 こそ神ならで三熱の。くるしみごいふ事有べき
か シテ詞 恥かしながらいにしへの。法の岩橋懸ざりし。其咎
めごて明王の。さつづくにて身を戒めて。今に苦しみ絶ぬ身な

を聞きてうち
よるこび妾に
なやめること
るあれば御勤
のついでに加
持して給はれ
ま乞ふ山伏曰
く御身に懺め
るこありさ
は如何なるこ
さか。主の女答
へて女は五障
の罪ふかきに
法のさがめの
咒詛を負ひこ
の山の名にし
おふ蔭かづら

○葛城

り ワキ上セツ 「是はふしきの御事かな。扱はむかしの葛城の神
のくるしみ盡がたき シテ 石は一つの神躰として ワキ上 蔭か
づらのみかゝる巖の シテ 撫ごも盡じかづらの葉 ワキ上 這ひ
ろこりて シテ 露におかれ 二人 霜に責られ起臥の。立居も
重き岩戸のうち 下同 明る侘しきかづらさの。神に五衰の苦
しみ有いのり加持してたひ給へど。岩橋のすへ經て。神かく
れにぞ成にける ワキ上 岩橋の苔の衣の袖そへて、
法の蕙のここさばに法味をなして終夜。彼葛城の神心。よる
の行ひ聲澄て。一心敬禮 シテ上 我葛城のよもすがら。和光の
影に顯はれて。五衰の眠を無上正覺の月にさまし。法性眞如
の寶の山に。法味にひかれて來りたり。よくく勤。おわしま
せ ワキ上 不思議やな峨峨たる山の常陰より。女躰の神こ



葛城

陸

嬰





に身を戒しめ
られ。三熱の苦
しみあれば。こ
の身をたすけ
て給はれ。と云
ふ。山伏不審し
て三熱の苦と
云ふ事は。そも
神ならでなき
ものなり。と問
ひかへせば。主
の女むかし役
の行者小角と
云ひしもの。吉
野の金峯山と
葛城山とのあ
ひだに。通ひ路

覺トホしくて。玉タマの筭サン玉タマ葛カの。猶ナドかけ添ツて蔦ツタかづらの。這ハまこはる
る小忌衣コトモイ。是シテ見給へや明王メイオウの。さづくはかゝる身を戒イ
めて。猶ナド三熱サンネツの神慮カミココロ。年トシふる雪ユキや。標シラゆふ
葛城山カキの岩橋イハハシの。夜ヨなれ。月雪ツキユキの。さもいちしるき神体カミタマの
見苦ミしき顔カホはせの神姿カミカタは耻ハかしや。よしや芳野ヨシノの山葛ヤマカヅラ。かけ
て通カへや岩イハはし。高間タカマの原ハラは是コトなれや。神樂歌カミガクはじめて大
和舞ワタマシいざやかなでん。降雪コノユキの標シラゆふ花ハナの。しらにきで
高間タカマの原ハラの岩戸イハドの舞マシ。天アマのかく山ヤマも向ムカひにみえたり。
月シロ白シロく雪ユキしろく。何ナニれも白妙シロタエの氣色ケシキなれ。名ナにほふ葛
城カキの神カミの顔形カホガタちをもなや面オモはゆや。耻ハかしや淺間アサマしや。淺間
にも成ナぬへし。明ぬ先アカサキに。葛城カキの。明ぬ先アカサキに。かづらさの夜
の。磐戸イハドにぞ入給ふ磐戸イハドのうちウチにぞ入給ふ

○葛城

をつくらんきて、神々を使役して岩橋を渡さしむ。かつらぎの神はかたちの醜きを耻ぢて。夜なるらでは出でざりしを。小角いかつてこれを咒咄し。縛して深谷につなぎたりと云ふ傳説の筋を物語る事ありて、神がくれし給ひければ山伏達も今の女性に葛城山の神の化身にて。我等の加持祈禱をうけ給ひ。三熱の苦をまねかれ給はんとのこゝにてありけるか。さらば祈念し参らせん。一心敬禮して爰に。縲經をはじめし折から。葛木一言主神、女跡の神と現じ給ひて法味を悟り。佛道を得たまひたる。そのよるこびの神ごころにて。神うたをばじめ大和まひなごがなでる。云ふこゝと作れり

○葛丸

○蟬丸

蟬丸は式部卿敦實親王、宇多天皇の皇子の雑色なり。盲目にて琵琶を得たりと云ひ。又蟬丸は暇きものなりといへども年来宮の

蟬丸

定めなき世の中々に。くうき事や頼みなる覽。是は延喜第四の御子。蟬丸の宮にておはします。實や何事も酬有けるうき世かな。前世のかいぎよらいみじくて。今皇子は成給へ共。襦袢の中よりなごや覽。両眼盲ましくて。さうてんに月日の光なく。闇夜に燈暗ふして。五更乃雨もやむこゝな

彈き給ひける琵琶を聞て上手になり。後ち盲目となりて會坂に居れり。又今昔物語二十四に今はむがし源博雅朝臣と云ふ人あり。延喜の御子兵部卿親王の子なり。常に琵琶を善くす。其比逢坂の關に盲庵を造りて住みけるあり。名を蟬丸と云

し。明し暮させ給ふ處に。帝如何なる叡慮や覽。ひそかに具足し奉り。相坂山に捨置申。御ぐしをおろし奉れとの。論言出てかへらねば。御痛はしきは限りなけれども。勅定なれば力なく。足弱車このひ路を雲井のよそにめぐらして。篠の目の空も名残の都路をく。けふ出そめて又いつか。歸らんこゝもかたいたいの。よるべなき身のゆくへ。さなきだに世中は。浮木の龜の年をへて。盲龜の闇路たごり行。まよひの雲も立のぼる逢坂山に着にけり。如何に清貫御前に候。扱我をは此山に捨れくへさか。さん候宣旨にて候程に是迄は御こも申して候へ共。いつくに捨置申へきやらん。去にても我君は。堯舜より此かた國を治め民を憐れむ御こ成に。か様の叡慮は何ぞ申たる御事や覽。か

○蟬丸

ふ。蟬丸は琵琶なん微妙に弾ける。博雅此道を好み。蟬丸が庵異様なれば不行して京に來て住めかし。云ひやりける。首是を問て「世の中はとてもかくてもすごしてん。みやもわらやも果しなれば」博雅猶心にくと思ひけり。琵琶

○蟬丸

くる思ひもよらぬ事は候はじ。あらおろかの清貫かいひごこやな。我本來盲目の身と生ると事。前世のかひぎよう拙き故なり。されは父帝も山野に捨させ給ふこと。御情なきには似たれども、此世にて過去の業障をはたし。後の世をたすけんこの御はかりこと。是社誠の親の慈悲よ。荒なげくまじの勅定やな。宣旨にて候程に御くしをわらし奉り候。是は何さいひたる事そ。是は御出家ごてめでたき御事にてわたらせ給ひ候。實やこうくはんもごひをきりなればだんに枕す。唐士のせいしが申けるも。か様の姿にて有けるぞや。此御有様にては。中々盗人の恐れも有べければ。御衣を給つてみもの云ものを參らせ上候。是は雨によるたみの嶋ごよみ置つる。みの云ものか

に流泉啄木と云ふ曲あり。此盲のみ知りたるふり。是を習ひ得ん。其後三年の間夜々には會坂の庵に行て。今やひくらんと竊かに立聞しけれども更に弾かざりけるに三年さいふ八月十五夜に行きて親ふに。蟬丸ひさり琵琶を弾じ。今夜心あら

○蟬丸

また雨露の御ためなれば。同じく笠をも參らす。是はみさふらひみかさご申せごよみ置つる。笠ごいふ物よなふ。又此杖は御道しるべ。御手に持せ給ふべし。實々是もつくからに。千年のさかをも越なむご彼遍昭がよみし杖か。夫はあごせの坂ゆくつえ。爰は所も逢坂山の。關の戸さしのわらやの竹の。つえはしらごもたのみつる。父みかごには。すてられて。くる浮世にあふさかの。知るもしらぬも是みよや。延嘉の皇子の成行果ぞかなしき。行人征馬のかずく。上りくだりの旅衣。袖をしほりて村雨のふりすてがたき名残がなく。さりごてはいつを限りに有明の。つきぬなみだを押へつ。はや歸るさに成ぬれば。皇子は跡に唯獨り。御身にそふ物ごて

人來れかし物語せんと獨言いひければ。博雅立出て云ふやう。此三年爰にかよふ。幸ひ今夜汝に逢ひぬ。言よるこび互に物語して。彼の流泉啄木の秘曲を傳ふ。博雅これを習ひ得たり。是等の説を彼是取りて先づ蟬丸を延喜第三の御子さな

○蟬丸

は。琵琶をいだきて杖をもち。臥まろびてぞ泣たまふく。是は延喜第三の見子。さかがみこは我事也。我皇子は生るれこも。いつの因果の故やらん。心よりく狂亂し。邊土遠郷の狂人ぞ成て。翠の髪は空さまに生上つてなつれごも下らず。如何にあれ成る童部は何を笑ふぞ。なに我かみの逆さまなるがをかしいこや。實さかさま成事はをかしいよな。扱は我かみよりも。汝らが身にて我をわらふ社さかさまなれ。面白しく。是等は皆人間目前の境界也。それ花の種は地にうつもつてせんりんの梢に上り。月の影は天にかゝつて萬水の底に沈む。是等をば皆何れをか順見。逆なりといはん。我は皇子なれ共。そじんにくんだり。髪は身上より生上つてせいざうを戴く。是皆順逆のふたつなり面しろや。上シテ「柳

し。襦袢の中より育目にておはしましければ。帝の歡慮として逢坂山に捨てられ給ひしを。博雅三位と云ふ人。これを御痛はしく思ひて。爰に藥屋を作りて入れ奉りける。蟬丸の宮此藥屋に入りうき年月を琵琶彈きて過し給ふ處に。是も延喜第三

○蟬丸

の髪をも風は梳るに。地。風にも解れず。手にも分られず。地。かなぐり捨る見ての袂。撥双の舞かや淺ましや。花の都を立出てく。うさねに泣か賀茂河や。末白河をうちわたり。栗田口にも着しかば今は誰をか松坂や。關のこなたと思ひしに。跡になるや音羽山の名残をこの都や。松虫鈴むしきりくすの。鳴や夕陰の山科の里人もこがむなよ。狂女なれご心は清瀧川とこしるへこ。上シテ「逢坂の關の清水に影みはて。今やひく覽もち月の駒のあゆみもちかづくか。水も走井の影みれば。我なから淺ましや髪はたごろを戴き。黛も見だれくろみて。實さか髪影うつる。水の鏡といふなみのうつくなの我すかたや。蟬丸。第一第二の紋は索くとして秋の風。松を拂つて疎韻落。第三第四の宮は。我蟬丸がしらへも四

の御子逆髪さ
申す姉宮狂女
さなりて此送
坂山に來り給
ひ。藁屋の中
琵琶の音を聞
きつけて尋れ
より。圖らずも
兄弟對面し給
ふ事に作れり
但し蟬丸を皇
子さなせしは
盛衰記海道下
の詞ふぎに依
れるなるべし

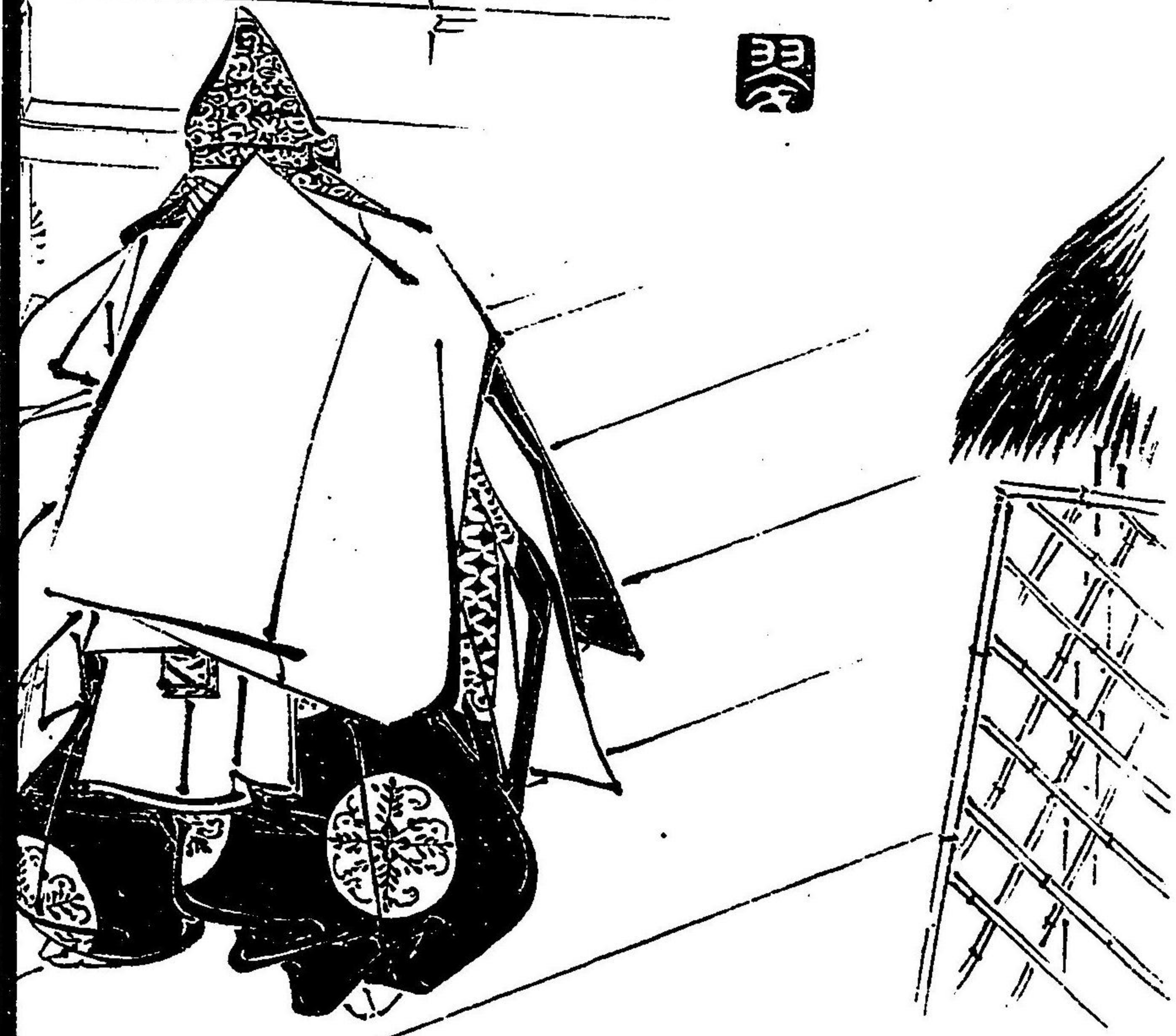
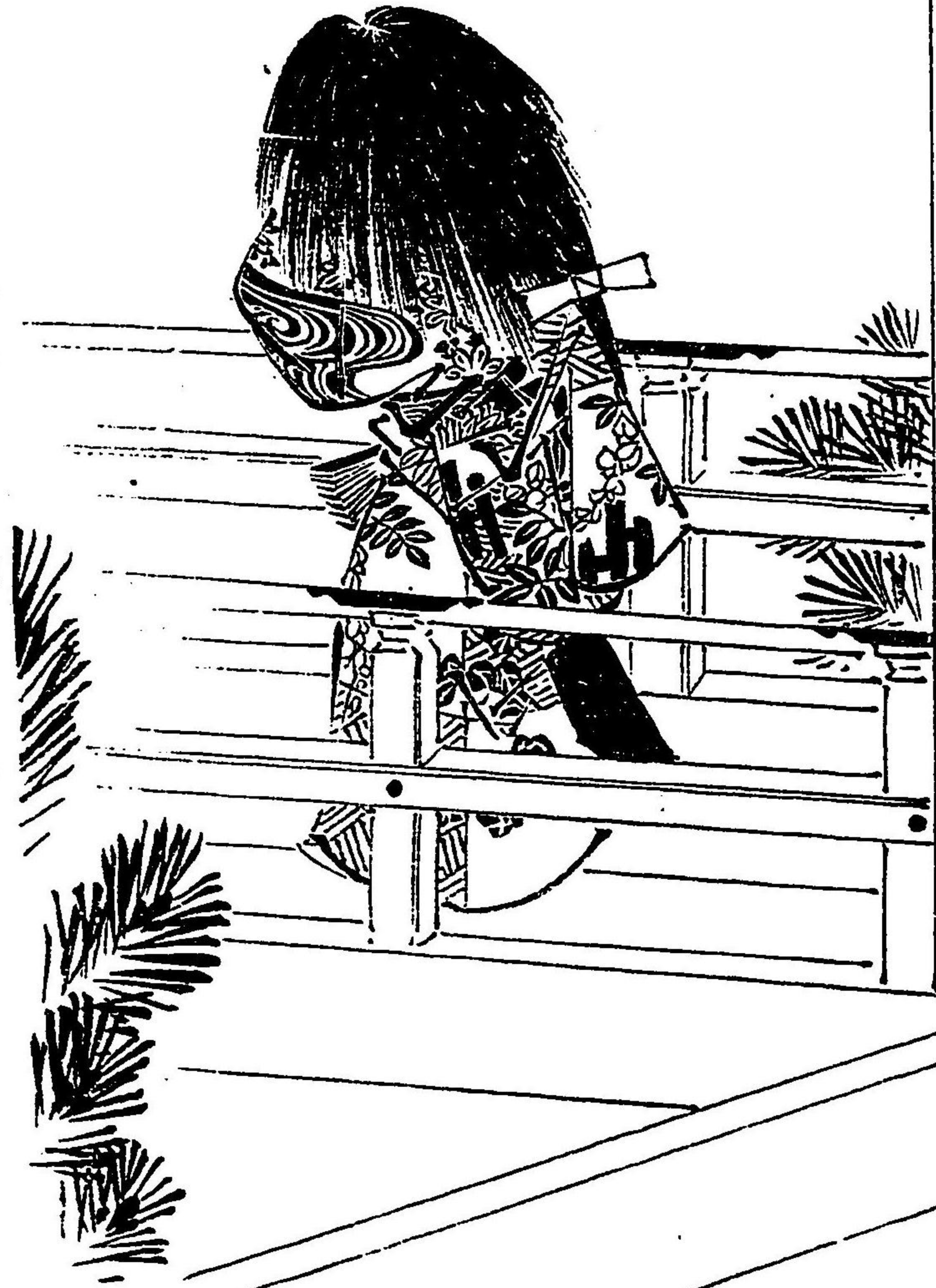
○蟬丸

の折フリからなりける村雨かな。荒心すこの夜ヨすがらやな。世中ヨリナカ
は。こにも角カクにも有アリぬべし。宮もわら屋も。果ハテしなければシテ上
「ふしぎやな是成コレナわらやのうちよりも。ばちおこけ高タカき琵琶ビバ
乃音聞ネキコゆ。そも是はごの賤シジが屋ヤにも。かゝるしらへの有アリける
よご。思ふにつけてなごや覽ミよになつかしき心ちして。わら
やの雨の足音アシナドもせで。竊ヒソかに立よりきく居たり蟬上「たそや
此コわら外の外面ソトにおこするは。此程折々訪トモらはれつる。博雅ハクガ
の三位サンにてましますかシテ詞「ふしぎ屋な近付チカツキ聲をよよく
聞は。弟イモの宮のこえなりけり。なふさかがみ社コトまるりたれ。蟬
丸は内ウチにましますか蟬「何逆ナニサカガ髪カミは姉宮アネミヤかご。驚オドロきわらや
の戸を明アればシテ「さもあさましき御有ミナリ様サマ「たがひに手
に手を取トリかはしシテ「弟の宮かイモノミヤカ「姉宮かアネノミヤカ
同トモ「俱トモに御名ミナ

蟬丸

睦

翠



をゆふ付の鳥も音をなく逢坂の。せきあへぬ御涙互に袖や
 しほるらん クリ地 それせんだんはふた葉よりかうばしこい
 へり。ましてや一樹の宿りごとして。かぜたちばなの香をこめ
 て。花もつらなる枝ごかや 蟬サシ 遠くはじようさうじよう
 げんさうりそくり。ちかくは又應神天皇の御子。難波の皇子
 宇治の見ごと。たがひに即位謙讓の御心ざし。皆是連理のな
 さげごかや シテ下 去ながら爰はせうこの宿りごも。思はざ
 りしにわらやのうちの。一曲なくはかくぞごもいかでしら
 への四の緒に シテ下 ひかれて爰によるへの水の。淺からざり
 し。契りかな。世は末世に及ぶごも。日月は地にねらぬ。なら
 ひご社思ひしに。我らいかなれは皇子を出てかく計。人臣に
 だにまじはらて。雲井の空をも迷ひ來て都鄙遠境の狂人路

頭山林の賤シ成ナて。邊土旅人の憐レみを頼ルむばかりなり。去カに
 ても昨日迄は。玉樓金殿の床ユカをみがきて玉ぎぬの。袖ひきか
 へてけふは又。かゝる所の臥處フシにて。竹のはしらに竹のかき
 軒も扉もまばらなる。わらやの床にわらの窓。しく物モノこても
 わらむしろ。是ぞいにしへの錦ニシキの茵シトネなるべし。上上たま上く
 と問トものこては。嶺嶺に木傳コツツふ猿サの聲。袖をうるはす村雨の音
 にたぐへて琵琶の音を。引ヒキならしひきならし。我音をもなく
 涙の。雨だにも音せぬわらやの軒のひままくくに。時々月トキトキはも
 りながら。めにみる事のかなはねば。月にも疎トく雨をだに。聞
 めわらやの起オキふふしを。思オモひひややらられて痛イタははししや。是シまでな
 りやいつまでも。名残ナノコは更さらに盡ツキすまじ暇申イダシて蟬丸セミヒ。一樹
 の陰の宿りヨここて。夫ソだだに有アにまましてげに。せうこの宮の御別ミツノミツ

○野守
 此論は野守鏡
 の古事を古歌
 と俗説とに依

れごまるを思ひやりたまへ。實シテ上いたはしや我ながら。
 行ユラは慰ナゲむかたもあり。ごまるをさそごごいいふ雲クモの立休タチヤスらひ
 て泣居ナキたり。なくや關路セキミチの夕ユフがらす。うかれ心はうば
 玉タマの。我黒ワクロかみのあかあで行ユラ。別路留セキミチノトドよあふさかの
 關セキの杉村過スギムラノカゆけば。人聲ヒトコエははくくなるままくくに。わら
 やの軒ノキに。たたととずずみて。たがひにさらばよつねには問トせ
 給タマへへこ。かすかに聲コエのする程ほどききと送オウり歸カエり見ミををきてなくな
 く別れおはしますく。

野守

次第ツヨク 苔コケに露ツユけき袂タビにや。衣コロモの玉タマををふくむらん。是シは
 出羽デフエの羽黒山ハツクロサンより出デたる山伏ヤマブシにて候。我大峯葛城ワタケにいらす

りて作れるものにしてまづ其仕組を記すべし。爰に出羽の國羽黒山の山伏が大和の國大峯葛城山に修行の爲め。峯入りせんとて本國を立出て。日を重ねて大和の國に着し道の邊に休らふ處へ。老人の出て來りたるを見て。先づ老人の在所を問

程候に、此度^{ワシウ}和州へ急^{イッギ}ぎ候此程の宿^{ヤド}かしまの草枕^{クサマクラ}。子にふし寅^{トラ}に起^{ヲキ}馴^{ナレ}し床^{トコ}の眠^{ネムリ}も今更^{イマサラ}に。かりねの月の影^{カゲ}共に。西へ行^{ユク}へかあし曳^{ヒキ}の。大和國^{ヤマトノクニ}に着^{ツキ}にけり。春日野^{ハルノ}の。烽火^{トウヒ}の野守^{ノリイデ}出て見れば。今いく程ぞ。若葉^{ワカバ}つむ。是に出たる老人^{ロラジシナ}は。此春日野^{ハルノ}に年^{トシ}をへて。山にも通^{カヨ}ひ里にもゆく。野守^{ノリイデ}の翁^{オヤジ}にて候あり。有^アがたや慈悲^{ジヒ}万行^{マンギョウ}の春^{ハル}のいろ。三笠^{ミカサ}の山に長閑^{ナガカ}にて。五重^{ゴジュウ}唯識^{ユイシキ}の秋^{アキ}のかせ。春日^{ハルノ}の里^{サト}に音信^{ネジツ}て。誠に誓^{チカ}ひも直^{スガ}なるや。神^{カミ}のまに。行^{ユク}かへり。運^{ウツ}ぶ歩^{フミ}もつもる老^{オシ}の。さかゆく御影^{ミカゲ}。仰^{オホ}くなり。唐^{モロコシ}士^シ迄^{マデ}も聞^キえある此宮寺^{コノミヤテラ}の名ぞたかき。むかし仲磨^{ナカマ}か。我^{ワレ}日本^{ニッポン}を思^{オモ}ひやり。あまの原ふりさけ見るこながめける。三笠^{ミカサ}の山陰^{ヤマノカミ}の月^{ツキ}かも。夫^{ソレ}は明州^{メイシュウ}の月^{ツキ}なれや。こゝは奈良^{ナラ}の都^{ミヤ}の春日^{ハルノ}長閑^{ナガカ}き氣色^{キシキ}かなく

ひ。是れに。ありげなる水のあるを。此水は名物にて。あるか。を尋ねぬ。老人答へて。是れ即ち野守^{ノリイデ}のか。みさ云ふ水なり。さ云ふ。山伏重^{オモ}れて野守^{ノリイデ}の鏡^{カガミ}さはい。さおもしろ。さ名なり。りさて。其い。れを問ふ。老人曰く。是れは我れら。こさきの

ワキ詞。いかに是なる老人^{ロラジシナ}に尋^{タズ}ぬべき事の候。此方^{コノカタ}の事に。て候か何事^{ナニ}にて候ぞ。御身^{ミコミ}は此所^{コノコロ}の人か。さむ候。是は此春日野^{ハルノ}の野守^{ノリイデ}にて候。野守^{ノリイデ}にてましまさは。是に。よし有^アけるなる水^{ミヅ}の候は。名^ナのある水^{ミヅ}にて候か。是社^{シタコレ}野守^{ノリイデ}の鏡^{カガミ}申^{モウ}水^{スミ}にて候へ。荒面^{アラタシ}白^{シロ}や野守^{ノリイデ}の鏡^{カガミ}は。何^{ナニ}ぞ申^{モウ}たる事^{コト}にて候ぞ。我ら^{ワラ}こさきの野守^{ノリイデ}。朝夕^{アサユフ}影^{カゲ}をうつし候程に。のもりの鏡^{カガミ}申^{モウ}候。又まここの野守^{ノリイデ}のか。さみこは。むかし鬼神^{キミジン}の持^モたる鏡^{カガミ}社承^{シヤウケ}り及^{およ}て候へ。何^{ナニ}ぞて鬼神^{キミジン}の持^モたる鏡^{カガミ}を。野守^{ノリイデ}のか。さみこは。申^{モウ}候ぞ。むかし此野^{コノノ}に住^スける鬼^{オニ}の有^アけること也。ひるは人^{ヒト}となりて此野^{コノノ}を守^モり。夜^ヨはおに。ご成^ナて是なる塚^{ツカ}に住^スけることなり。されば野^ノを守^モける鬼^{オニ}の持^モしかがみなれば。こて。野^ノもりの鏡^{カガミ}は。申^{モウ}候。ワキセル上^{ウヘ}。謂^{イハ}を

野守が朝な夕な影をうつすに
よりのての名なれどもまこと
の野守のかみさ
は。むかし鬼神の持ち
たる鏡さこそ承り
及ぶ云ひければ山伏
又そのかがみ野守の鏡さ
稱する事を問ふ。老人曰くむ
かしこの野に住みける鬼
のありしが

○野守

きけはおもしろや。儲は此野に住ける鬼の。持しを野守のかぐみ共いひ。又は野守が影をうつせば。水をものもりのかがみさといふ事。兩説いづれもいはれあり。野守が其名はむかしもいまも。かはらざりけり。御覽ぜよ。立よれば實も野守の水かぐみ。影をうつしていごご猶。老の浪はまし水の。あはれげに見しまゝの昔の我ぞこひしき。實やしたひても。甲斐あらばこそ古しへの野守の鏡えし事も年ふるき世のためしかや。いかに申候。はし鷹の野守の鏡の謂御物語候へ。語て聞せ申候べし。昔此野に御狩の有しに。御鷹をうしなひ給ひ。あなたこなたを御尋有しに。一人の野守參あふ。翁は御鷹の行へや。知たるご御尋有しに。彼翁申様。さん候是なる水の底にこそ。

豈は人となりてこの野をまもり。夜は鬼さなりてこれある塚に住みけるさあり。この野かもりける鬼の持ちし鏡なればさて。即ち野守のかみさ稱ふるなり。古き世の物語を爲す。山伏あらためてはし鷹の野守のかがみ

○野守

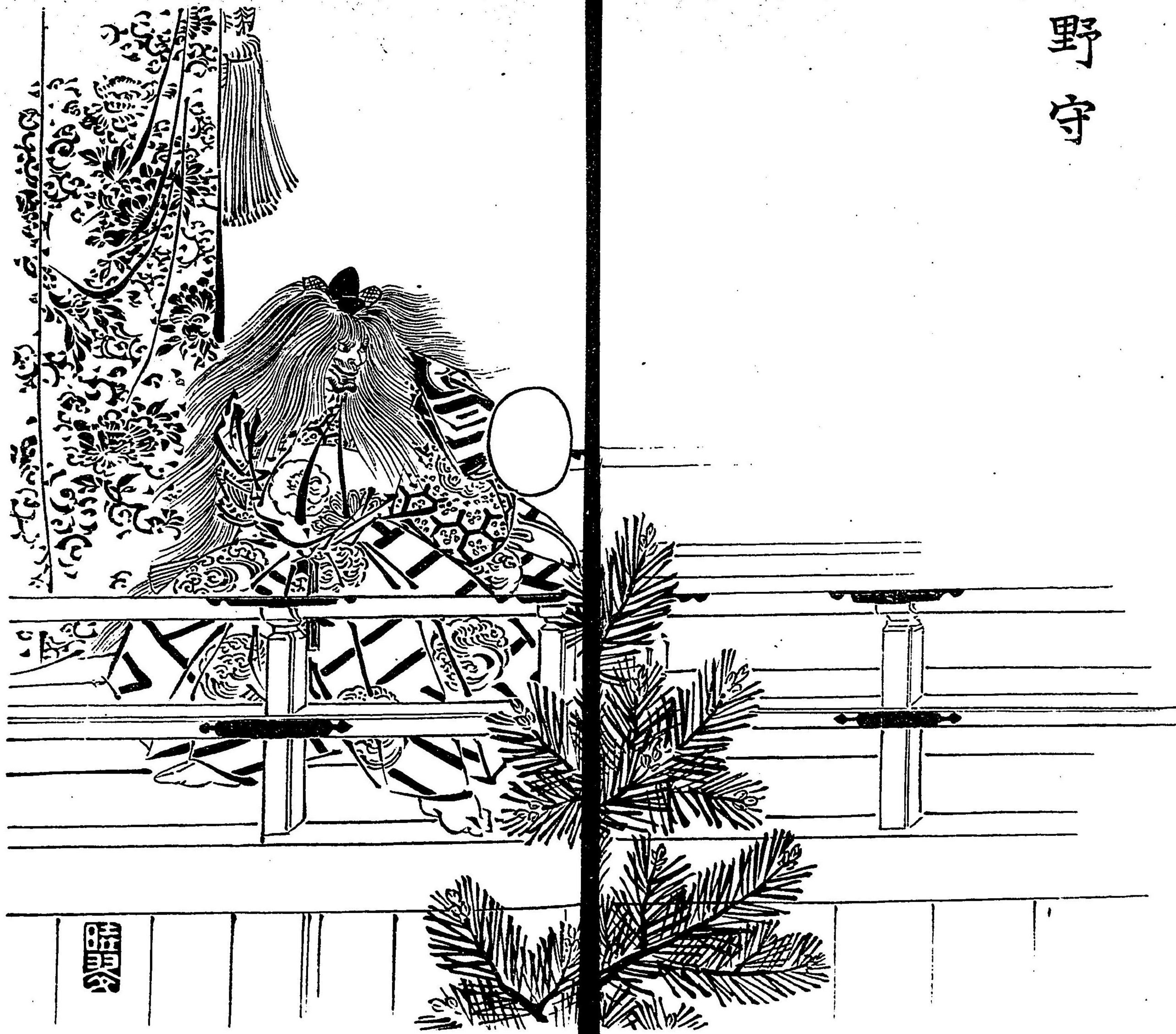
御鷹の候へご申せば。何しに御鷹の水の底に有べきぞごて。狩人はつご寄みれば。實もまさしく水底に。あるよご見えてしらふのたか。能くみれば木の下の水にうつれる。影なりけるぞや鷹は木居にありけるぞ。儲こそはしたかの。野守の鏡えてしかな。思ひたもはず。余所ながら見んごよみしも木の鷹をうつすゆる也。誠にかしこき時代にて。御狩もしげき春日野の。ごぶ火の野もり出あひて。叡慮にかゝる身ながら。老の思ひ出の世語りを申せばすゝむなみだ哉。實やむかしの物語。きくにつけてもまごこの野守の鏡見せ給へ。思ひよらずの御事や。それは鬼神のかぐみなればいかにして見すべき。扱や鏡の有所。かまほしきに春日野の。野守といふも我なれば。

○野守

得てしかふ。思ひおもはずよそなから見ん
 此歌(古今集に出たり)のこもるも。この水につきてのこもふるかこ問ふ。老人答へて昔此野に雄界天皇狩りし給ひけるに。御鷹のうせにければ。野守を召して尋ねて参らせよと仰せられ

ぐみはなぞか シテ「もたざらんご 下同ウツカガ 疑はせ給ふかや。たにの持たる鏡ならは見ては。恐れやし給はん。誠の鏡をみむ。ここはかなふましろのたかをみし水かぐみを見給へて塚のうちに入にけりつかのうちにぞ入にける ワキカ、ル上「かゝる奇特にあふ事も。是行徳の故なりご。思ふこころを便にて。鬼神の住ける塚の前にて。肝膽をくだき祈けり。我年行の功をつめる。其法力の眞あらば。鬼神の明鏡あらはして。我に奇特を見せ給へや。南無歸依佛 後シテ「有難や。天地を動かし鬼神を感じせしめ 上地「土砂山河草木も シテ下「一佛成道の法味にひかれて 上同 鬼神に横道曇りもなき野守のかぐ見は。顯はれたり ワキセル上「おそろしやうちひかくやく鏡の面に。うつる鬼神の眼の光 マナコ おもてをむくべき様ぞなき シテ「恐れ

野守



野守

けるに野守か
しこまりて其
御座は是れふ
る水底に居る
さ申し上けれ
ば。何しに御た
かの水の底に
あるべきぞこ
て。狩人急き見
れば。實にも正
しく水底に御
座のあるごま
く影うつりて
鷹は木居にあ
りけるにぞ。さ
てこそばした
かの野守のか

給はゞ歸らんご。鬼神は塚に入んごすれば
待給へ。夜はまだ深き後夜のかね
のかがみ
を積ここ一千余箇日しばしば身命ををしますさいくは。き
つすいに隙をえず。一こんがら二さいいたか。三にくりから七
大八大金剛童子東方
上地「または南西北方を寫せは」
上地「天を寫せは」
た大地をかぐみ見れは
様をあらはす一面八丈の。じようはりの鏡となつて。罪の輕
重罪人のかしやく。擲や鐵杖の數々悉く見わたり扱こそ鬼
暫く鬼神
時はごらふす野守
かさねて珠數
台嶺の雲をしのぎ。く年行の。功
上同「おしもんぞ」
上同「法味にうつり給へこて」
上同「かさねて珠數」
上同「身をのぞき」
上同「年行の。功」
上同「一こんがら二さいいたか」
上同「三にくりから七」
上同「大八大金剛童子東方」
上同「または南西北方を寫せは」
上同「天を寫せは」
上同「ひさうひさうでん迄限なく」
上同「扱ま

とみ得てしかなど讀みしものこの木の鷹をうつしと故ふりさむかしの物語をなす山伏なほ誠の野守の鏡見たしと云ふ老人其かみは鬼神のものふれば如何にして見すべしぞとたゆたふ有様見えけるが鬼の持ちたる鏡なれば見ればかならず恐れたまはんまことのかみみを見んことはかふまじとて云ひもあへず道のほり塚のうちにかくれければ山伏達も斯る奇特に逢ふことはこれ行徳の故ふりと思ふことろをたよりにて鬼神の住みしと聞えたる塚の前にて肝膽をくだき祈念して我無歸依佛と一心こめて祈りける折から鬼神の頭はれけるを見ればおそろし鬼神の持ちたるかがみにうつる眼の光りあたりにかやき身の毛もよだつはがりなり山伏之を見るよりも一心不亂に珠數おしもんでますく祈り禱るにぞ鬼神は行者にうちむかひ恐れたまはばかへらんとしてふたたび塚に入らんとするを山伏しばしと呼びさめ法味にうつりたまへとてかされて珠數を押ししんで一こんがり二せいたか三にくりから七次八大金剛童子東方降三世明王と祈りを上げる鬼神かがみを持ちて千變万

神に横道をたぐす。明鏡の寶なれ。すはや地獄に歸るぞとて。大地をかつばと踏ならし。大地をかつばと踏破つて。奈落の底にぞ入にける

○岩船

化の働きを爲すことを作れり

○岩船

この謡は神代の古ることと名所をかりて君が代を祝ぶことろもて作曲せしものにして時の帝いさ賢王にましますものからふく風枝をならさす民また戸ざしを祭さすいさ目出度御代にて。攝津の國住吉

岩船

次第 實治れる四方の國。く。關の戸さくで通ん。抑是は。當今に仕へ奉る臣下也。偕も我君賢王にましますにより。吹風枝をならさす民戸ざしをささす。誠に目出度御代にて候。去間攝州住吉の浦に。初て濱の市をたて。高麗もろこしの寶を買こるへしこの宣旨にまかせ。只今津の國住吉の浦に下向仕り候。なに事も心に叶ふ此時の。く。ためしもありや日の本の國豊かなる秋津洲の浪もおこななき四の海。こま唐土も残りなき。貢の道の末爰に。津守の浦に着にけり。く。松風も。長閑にたつや住吉の市のちまたに出るなり。夫圓滿十里の外なれども。爰は所も住吉の神君こ

○岩船

の浦にはじめ
て高麗唐土の
寶をうり買す
るものあり。當
代の主上これ
をきこしめし
給ひ。臣下に勅
してそのたか
らを買さるべ
き旨を命じた
まふ。臣下宣旨
を奉じて住吉
の浦に下向す。
この所へ出で
來たる市人の
有様を見るに。

○岩 船

は隔てなき。誓ひぞ深き瑞籬の。久しき代々のためしごとて。
爰に御幸を深みどり。松にたくへて千世までも正しき君の
御旅居。いつくも同じ日の本の。もれぬ惠みぞ。有がたき
下哥
いざく市に出鹽の月面白き松の風 伊勢しまや塩
干にひらふたましくも。く。待えにけりな此御代に。鵲
のたまかつらかゝる時もし生れきて。たみ豊かなる樂しみ
を何にたごへん秋津洲や。高麗もろこしも隔てなき。寶の市
に出うよたかからの市に出うよ 不思議やな是なる市人
をみれば。姿は唐人なるが。聲は山跡詞也。又銀盤に玉をす
ゑて持たり。そも御身はいかなる人ぞ。さん候かゝる
御代ぞごあふき参りたり。又是なる玉は私に持たる寶なれ
共。餘りにめでたき御代なれば。龍女か寶珠も思召れ候へ。

其妻は唐土人
なるが。其物云
ふ音聲正しく
山和詞にして。
また銀盤に寶
珠をすへて持
ちたり。官人不
思議に思ひつ
と。其異様ふる
市人に向ひ。御
身は如何なる
人なるか。問
ひければ。市人
答へてそれが
しは御代の惠を
仰がんと爲め。ま
たこの寶珠は

○岩 船

是は君に捧物にて候 有難しく。夫治れる御代のし
るしには。賢人も山より出。聖人も君につかふといへり。然
れば御身は誰なれば。かゝる寶を捧るやらん。委奏聞申す
べし。荒むつかしと問給ふや。唐かつぼの玉こても。寶
珠の外にその名はなし。是も津守の浦の玉。心のこころしと思
召せ。心の如しと聞ゆるは。扱はなになれふ如意寶珠
を。我君にささげ奉るか。はこぶ寶や高麗くたら
唐土舟も西の海 榛が原の波間より 影れ出し住
吉の 神も守りの 道すぐに 爰に御幸を住よし
の。神と君とはゆき合の。まのあたりあらたなる。君の光り
ぞめでたき 千世迄こきくうる市の數々に。四
方のかこべに人さわく。住よしのはまの市たからの數をか

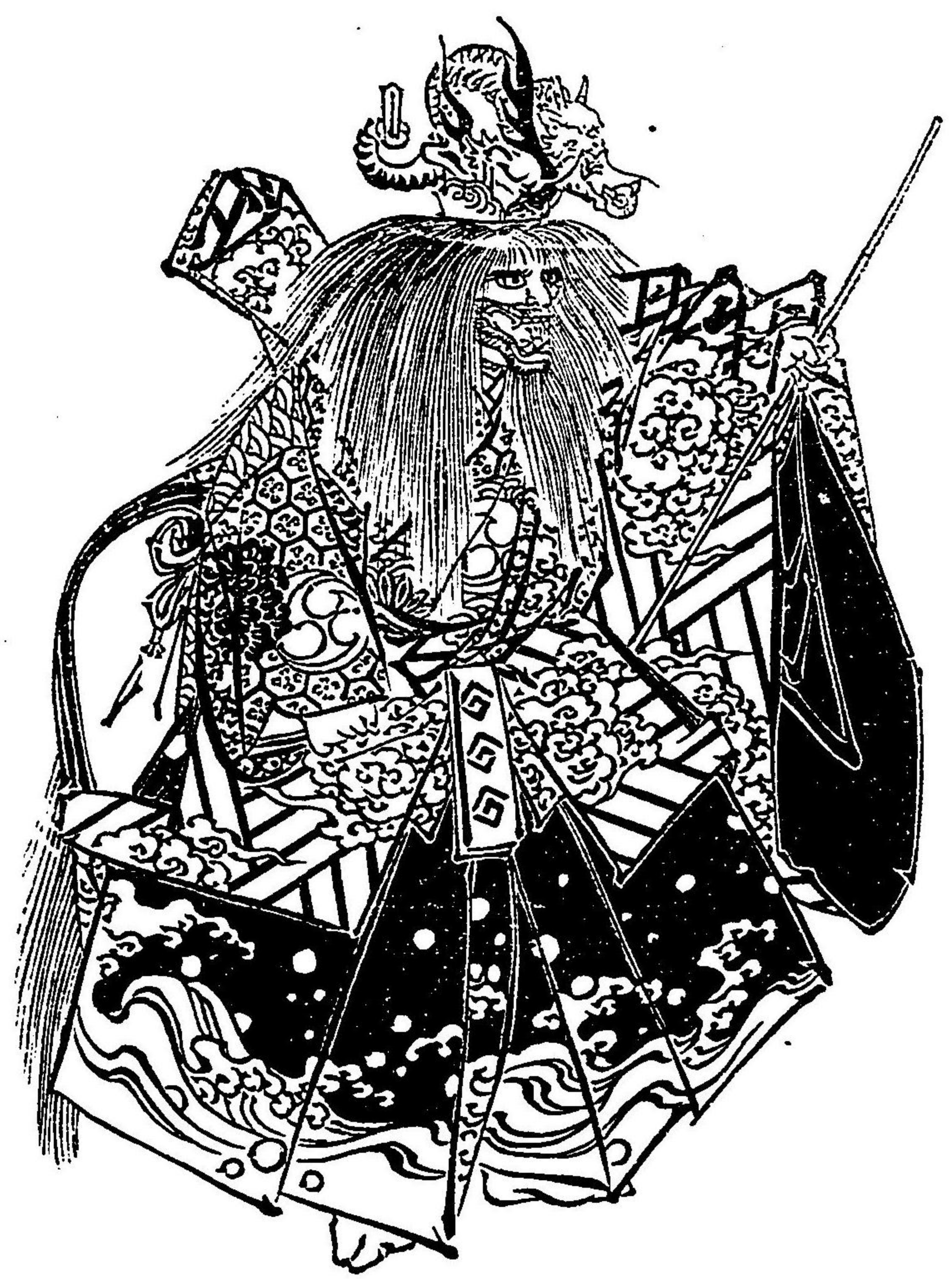
それがしが。所持の寶にこれあれども。餘りにめでたき御代なれば。君に捧げたてまつらんためこれまで持ちて参りたり。龍女が寶珠さと思召されたし。さてこれを官人にさしげられは。官人これをうけ取りて。ありかたし。ありがたし。夫れ治ま

〇岩船

ふごかや シテ上 春の夜の一時を。千金をなすこても。たごへはあらじ住吉の。松風あたひなき金銀珠玉いかばかり
上地 上地 千顆万顆の玉衣の。浦は津守の宮柱 シテ たつ市やかた敷
に 地 まがきもつづくかたそぎの シテ下 みごころにしき
あや衣 上地 比も秋たつ夕月の。影に向ふや淡路がた シテ 繪
島が磯はなぐめにて 地 松のひま行捨小舟 シテ よるか
出る歟 シテ 住よしの 同キ 岸うつ波ははうはうたり松吹風
はせつづくこして。さくめこかくやらん。其四の緒の音
をこめししんやうのゆご申共。是にはよもまさしおもしろ
のうらのけしきや シテ 又岩舟のより來り候 ワキ そも岩
舟の寄くるこは。御身は如何なる人やらん シテ 實旅人はよ
もしらじ。天も納受喜見城の。寶を君に捧げ申さんこ。天の

岩
船

睦
琴



れる御代のし
るしには賢人
も山より出で
聖人も君につ
かふさいへり
然れば御身は
誰なればか
る寶を奉らん
さすもまた
人にてはある
まじそのいは
れを語りたま
へ。くはしく奏
聞申すべしと
云ひければ。市
人これをさへ
ぎりて。あらむ

岩舟雲の浪に。高麗唐土の寶の御ふねを。只今こころによすべ
きなり。今は何をかつくむべき。其岩舟を漕よせし。天の
さくめは我そかし。飛かける天の岩舟たぐへてぞ。秋津島根
は宮柱住吉の松のみごりの空の。あらしこ共に失にけり
く。久かたの。天の探女か岩舟を。こめし神代の。幾久
し。後シテ上。我は又下界にすんで。神を敬ひ君を守る。秋津島
根の。竜神なり。引上地。或は神代のかれいをうつし。又は
治る御代に出て。寶の御舟を守護し奉り勅もおもしろ
く。此岩舟。寶をよする波の鼓。拍子を揃へてゑひやゑ
ひやゑいさらゑいさ。ひげや岩ふね。天のさくめか
波のこし鼓。ていごうの拍子を打なりやさくらなみ
えめくり廻りて住吉の松のかせ吹よせよゑいさ。ゑいさら

○岩 船

つかしき問ひ
たまふや。唐土
合甫の玉とて
も寶珠の外に
其名はなし。こ
れも津守のう
ちの玉。心のこ
ろしきおぼし
めせ。官人重れ
て云ふやうは。心の如しききこゆるは。さては名におふ如意寶珠を。我君にさくげたてま
つるか。市人曰くそれ賢王の御代のしるしは天も納受地もうるほひ。かゝる寶も出現す
べしと。官人これに應じ曰く實にこの御代の有様は。治めぬ國も自から。離きしたがふ四
方の國と。市人つとけてこれを祝ふて。運ぶたからや高麗百濟唐土舟も四つの海と。互に
かたりかたらふて市人やがて立ち上り又岩船のよるの空月のあまりに急ぐべし。いと
ま申さん人々よと。云ひつとくを去らんすれば。官人これをよびさめて。そも岩船の
より來るときは御身はいかなる人やらん。問ふを市人これに應じて。今は何をかつむ
べき。その岩船を清きよせし天の探女は我れなりと。云ひもおぼらす飛ひかけり。松のみ

ゑいさごおすやからろのくうしほのみちくる浪につ
て。八大龍王は海上に飛行し御舟のつな手を手にくりから
まき。塩にひかれ波に乗て。なが居もめでたき住吉の岸に。
寶の御ふねをつけおさめ。數も數万のさくげもの。はこび出
すや心の如く。金銀珠玉は降みちて。山のこくくに津守の浦
の。君を守りの神は千世までさかふる御代ごぞなりにける

じりの空ふきめぐる。とりしき共にうせにければ。官人あごに残り居てふに。をも奇特な
まつ折から。我れは又下界にすんで神をうやまひ君を守る。秋浦嶋根の龍神なりと名の
りて龍神あらはれ出で。おさまる御代のごさぶき祝ふ。まひはたらきふごあることとせ
り

○正尊

平氏亡びて後
源頼朝は梶原
景時の謾言を
信じ義經との
間不和になり。
文治元年九月。
土佐坊正尊を
して義經を六
條堀川の館に
討たんだめ都
に上らしむ。義
經正尊の上京

正尊

是は西塔の武藏坊辨慶にて候。諸も我君判官殿は。鎌倉
殿より大名十人付申され候へ共。内々御中不和に成給ふに
より。心を合せて一人宛悉下りはて候。又かまくらより土
佐正尊ご申者。昨日都へ上て候が。是は我君をねらひ申さむ
爲ご聞召れ。急つれて参れこの御錠にて候程に。唯今土佐が
旅宿へご急き候。いかに案内申候。判官殿より御使にむさし
が参じて候。武藏殿は荒珍らしや。何の爲の御出に
て候ぞ。さん候是は君よりの御使にて候。御上りのよし

せしは。我を討
たんが爲ふる
事豫知すれど
も。わざと武藏
坊辨慶を其旅
宿につかわし
めて土佐坊を
召し。其何の爲
めに都へ上り
たるかを糺し
給ふ。正尊答へ
て熊野詣のた
め上りたり又
君より別に御
文は参らす。只
御言葉にて都
に子細なき事。

○正尊

聞召及ばれ。何こて伺公は候はぬぞ。鎌倉殿の御事も聞召れ
度この御事にて。いそいで御参りあれこの御事にて候
シテ「さん候宿願の子細候ひて。熊野詣の爲に罷上りて候。昨
日京着仕候へ共。道より違例仕り扱遅りて候。委細承
候。片時も國の御事をは聞き召れ度この御事なれば。只今御
供申さんご。是非をいはせぬむさし坊に。剛なる。士佐坊も
のぼればぐたる事もいさあらまじごもいたづらに。なる
ごもよしや露の身の。消て名のみを殘さばやく。かに申上候。土佐正尊を召つれて参りて候。如何に土佐坊珍ら
へ。畏て候。こなたへ御参候へ。しや。扱何の爲に上て有ぞ。鎌倉殿より御文はなきか

偏に御渡りあ
るが故なり。な
ほよく守護な
し給へこの仰
せなりと陳す
れども。義經尙
ほ詰問してや
まされば。土佐
坊當座通がれ
の手段として。
爰に起請文を
書く其文に曰
敬つて申。起
請文の事。上
は梵天帝釋四
大天王煇耀法

○正尊

さん候さしたる御事も御座なく候間。御文は参らざる候。
御言葉にて申せご候ひしは。都に子細候らはぬ事。偏に御渡
候故と覚え候間。相かまへて能守護させ給へご社仰候ひつ
れ。よもさはあらじ。よし經討に上りたる御使ごこそおほ
えたれ。御証の如く。大名共を指上せられ候はゞ。宇治
瀬田の橋をもひき。都鄙のさはり共なりては中々あしかり
なんご思し召。土佐坊上り物詣のやうにて。討申せごこそ仰
付られ候らん。わ僧に於ては此客僧。手柄の程をみすべきな
り。荒勿躰なや。たごひ人の讒奏により。君こそ仰出さ
る共。さすが武略のむさし殿。さは有まじご申されてこそ。
御兄弟の御中に。物いひさがなき事有まじ。先静まつて事の
譯を。委くきけや武藏坊。是は御証にて候へ共。何に依て去

王五道の冥官
泰山府君。下
界の地は伊勢
天照大神を始
め奉り。伊豆
箱根。富士淺
間熊野三所。
金峯山。王城
の鎮守稻荷祇
園加茂貴船。
八幡三所。松
の尾平野。惣
じて日本國の
大小の神祇冥
道請し驚かし
奉る。ここに
は氏の神。全

○正尊

御事の候へき。少し宿願の事候ひて。熊野詣のために罷上り
て候。梶原が譏奏により。義經を鎌倉へも入られず。見參
をだにし給わで。追上せられし事はいかに。其御事は如
何候やらむ。身に於て全く緩怠あらざる趣き。起請文に書あ
らはし。唯令御目にかくべし。當座の席を遁れんこ。
土佐は聞ふる文者にて。自筆に是を書つけ御前にこそ
は参りけれ。敬つて申起請文の事。上は梵天帝釋四大
天王焰魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地には伊勢天照
大神を。初奉り。伊豆箱根。富士淺間熊野三所。金峯山。王城
の鎮守稻荷祇園加茂貴船。八幡三所。松の尾平野。惣じて日
本國の。大小の神祇冥道請し驚かし奉る。ここには氏の神。
全く正尊討手に罷上る事なし。此事偽り是あらば。此誓言の

く正尊討手に
罷上る事な
し此こと偽り
是あらば。こ
の誓言の御野
をあたり。來
世は阿鼻に墜
罪せられん者
なり仍て起請
文かくの如し
文治元年九月日
正尊
讀み上げたり。
義經もさより。
その虚言なる
ことを知れど
も文をふるふ

○正尊

御罰をあたり。來世は阿鼻に。墜罪せられん者なり仍て。起
請文かくのごとし。文治元年九月日正尊と讀上たるは。身の
毛もよだちて書たりけり。本來虚言とは思へとも。文を振ふ
て書たる。器用を感じおぼし召。御盃を下さる。折ふし御
前に磯の前司が娘に。静といへる白柏子。今様をうたひつ。
おしやくに立て花かつら。かゝる姿ぞたくひなき。舞の袖
シツカ。君か代は。千世にひこたび。ある塵の。しら雲かゝる
山さなるまで。く山さ成まで。かわらぬ契りを頼む
中の。へだてぬころは神ぞ知らんよく。申せごし
つかにいさめられし土佐坊御前を罷歸れば。君も御寐所に
いらせ給へはおの。退出申けり。いかに申上候。先
に御申候ごこく。かぶるを二人土佐が宿所を見せにつかは

て書きたる正
尊の器用を感
じ。御盃ふご下
されける。折か
ら御前に。磯の
前司が女に。靜
さいへる白柏
子の居りけれ
ば。御酌なごし
且つうたひ且
つ舞ふて。義經
の頼朝に對し
異心なき事は。
人は知らずと
も神こそ知る
しめさるらめ。
よくくこの

○正尊

し候處トコロに。餘りに遅歸り候程に。女は苦クルしかるまじきご存ソンし。
はした者モノイチニ一人さらぬ躰テイにてみせにつかはし候へは。彼女歸
りて申様。かぶろこおぼしき者は正尊が門カドに切伏キリフセられて候。
宿所ヤドコロにて鞍置馬クワチキウマひしこひつ立タテ。大幕オホマクのうちには矢ヤを資弓サキユミを
ばる者モノごも。皆具足ミナグツクして唯今タケイマよせんご出立候イダタテ。少しも物詣モノモトメの
けしきは見えぬよしをこそ申候へ。判詞ハカシ「本來覺悟モトヨリカクゴのまへな
れば。何ナニほどの事の有アルべきぞ。其儘ソノマテやがて御座ゴザを立タテ
シツカ「靜シヅカは着背參キセナガマシらす。上同ドウよし經是ツネコレをめされつゝ。御ミ
ばかせをこつてしづ〜ご中門ナユカドの廊ロウに出給イダシタマひ。門カドをひらか
せ諸共モロトモに。よせくる勢セイを待給マテふ〜。同ドウ「しら浪ナミご。よそにや
きかむわたづみの。深フカきこころは。ある物モノを。シツカ「其時正尊キトキテイソン
大音上オホネノナゲて名乗ナノリやう。是は鎌倉殿カマクラノミヤの仰オノケにより。正尊討手テイテに向ムひ

正尊



こを頼朝に
 申せよのこ
 るもていさ
 られ土佐坊御
 前を立つて旅
 宿に歸る。我
 も寮所に入り
 給ひ。また辨
 慶をばじめし
 て御前に居り
 し名々も退出
 しける折から
 に。先きに仰せ
 を聚りて。土佐
 坊の旅館に使
 はしめたる忍
 びのしもの立ち

たり。さうく御腹召れよ。天地もひどげ。よばはりけ
 り。味方の勢は是を見て。あの土佐坊を討たらん。我
 もくごすむ中に。江田の源三熊井太郎。辨慶を先こし
 て。門外に切て出れば。寄手のつわもの渡りあひおめさき
 んで戦ふたり。其時辨慶表に進み。いかに土佐坊慥に
 さけ。さても書つるそら起請の。罰をたちまああたふへし。
 いざ一太刀ご呼はれば。大將うたせて叶はじ。急ぎ
 馬より飛でたり。好む打物かいこむで。辨慶をめぐけてか
 りける。天晴器量の仁躰かな。扱汝はたご尋ねれば
 光もの其物にあらねごも。正尊が内に名を得たる。陸奥の住
 人。姉和の平次光景。大音あけてぞ名乗ける。實ゆ
 敷も名のる物かな。されごも汝は土佐が郎等。我には不足の

○正尊

かへりてその
動靜を注進す。
辨慶これを取
り次いで義經
に。先きに御説
のごさく。かふ
るを二人土佐
が宿につかは
したる處。餘り
に歸りの遅刻
せしほごに。尙
ほはしたも
一人つかはし
たるに。彼もの
かへり來て注
進する様。かふ
ると思しきものは。正尊が門に切伏せられて。宿には鞍置馬ひしこひつ立。又大幕の中

○正尊

者なれども心ざしをば報せんご
長刀やがて取なほし。
無慙や汝手にかけてむご。こむ長刀を打はらひ。請なが
せは又取直しちやうごうては。はつたごあはせ。かさねてう
つにうちこまれて。何かはたまらずから竹はりにふたつに
なつてぞ失にける。正尊是を見るよりも。宗徒の郎等
數輩うたせていまはかなはじご馬よりおり立亂れ入を。義
經うち物取直し給ひ。透間をあらせず戦ひ給へば靜も諸共
に打拂ひうちはらふ。正尊叶はじご引たちけるを。辨慶追つ
め戦ひけるが。押ならべむずご組ゑいやご投ふせ押つけ
るを。大勢ごりこめ繩うち懸て。よろこびいさみ囚人をひか
せ。御門のうちにぞ入給ふ

には矢を貰ひ弓を張るものごも。皆具足し唯今寄せんご出で立ち。少しも物詣の氣色は
見ぬゆ。こそ申したりご言上す。義經はもごより覺悟の事ごて。其儘御座を立ち給へば
靜は着背參らするな。よし經ごつてめされつご。御佩をさりしつご。ご中門の廊に出給
ひ門を開らかせ。辨慶はじめ屈指の郎等したがへられて。寄せ來る勢を待かけ給ふ。正尊
かくごは知らずして。手勢を率ひて進み來たり。大音上げて名のろやう。鎌倉殿の仰せに
より正尊討手に向ひたり。ごご御腹めされよご天地にひまけご呼ひかけければ。辨
慶を先ごして我もご討つて出で。おめさけんで戦ふたり。其ごき辨慶表に進み。いか
に土佐坊證かにきけ。先きに書きたるそら起請の罰を忽ち與ふべし。いご一太刀ごよば
はる所に。土佐が郎等平次光景。大將うたせてかなばじご。辨慶に立ちむかひしか。忽ち切
て捨られければ。正尊自から馬より下りて。辨慶ご組み合ひしが終に生捕らるごごに
作れり

○玉葛

玉葛の内侍は。
致仕の大臣。中
將さいひし時。
夕顔の上にか
よび給ひて生
玉葛
是は諸國一見の僧にて候。我この程は南都に候ひて。靈
佛靈社残りなく拜み廻りて候。また是より泊瀬詣ご志して
候。ならのはの名にねは宮の古言を。思ひ續けて行末は

○玉葛

れたまひし御
子ふり。内侍三
歳のさき母に
別れ。四歳の時
乳母の夫太宰
少貳に連れら
れて任國の筑
紫に下り。十歳
の頃任果て、
京に歸るべか
りしに。少貳重
く煩ひしかば、
三人の子に。此
姫君を都に上
せて御父君に
知らせ申べし
と。念比に遺言

○玉 葛

磯の上寺ふしおがみ。法のしるしや三輪の杉。山本ゆけば程
もなく。泊瀬川にも着にけりく。 シテ女一セイイキト 程もなき。船の
泊りや初瀬川。のぼりかねたる。けしきかな サシ 船人も誰
をこふこか大島の。浦かなしげに聲たてと。こがれ來にける
いにしへの。果しもしいさや白浪のよるべいつくぞ心の月の。
み船はそこ。はてしもなし。誰我ひこりみなれ棹竿も袖の
いろにのみ。暮て行秋の涙か村時れ。く。古河のへのさびし
くも。人を見るらん身の程も猶うき舟の楫を絶。づなでかな
しき類ひかなく。 ワキ調 ぶしぎやな此河は山川の。さも淺
くしてしかもみなぎる岩間づたひを。ちいさき舟にさをさ
す人を見れば女也。そも御身は如何來人にてましますぞ
シテ調 是は此初瀬寺に詣でくる者なり。又此川は所から。名に

してむふしく
成りければ。登
り給ふこも
出來がたくし
て月日經にけ
り。此姫おこな
しく成り給ふ
につけて。母夕
貌の上よりも
まさりてうつ
くしかりけれ
ば。筑紫の國の
人消息するか
た多かりける
中に。太夫の監
さて。肥後の國
に權威あるも

○玉 葛

流れたる海士小舟。泊瀬の河こよみおける。其河の邊の江に
しあるに。不審はなさせ給ひそこよ。 ワキ調 荒面白のここ葉
やな。實あまをぶね初瀬こは。ふるさ詠の言葉なるへし去な
から。又其類ひも浪小舟。さして謂の有や覽 女 いや何事の
夫よりも。先御らんぜよ折柄に 上同 ほのみえて色づく木々
のはつせ山。く。風もうつらふ薄雲の。日影も匂ふひこしほ
の。さぞなけしきもかく河の。浦廻の詠め迄實類ひなや面白
や。河音聞えて里つとき。奥物ふかき谷の戸に。つらなる軒を
絶く。の霧間に残す夕へかなく。かくて御堂に参りつ。
く。ふだらくせんもまのあたり四方の詠めも妙なるや。紅
葉の色にこきは木の二本の杉に着にけりく。 女調 是社二
本のすぎにて候へ能く御覽候へ ワキ さては二本の杉にて

の來たり。三人の子をかたらひ玉葛を迎へ取るへき事を頼みしかば。次郎三郎は之を諾せしに。太郎一人母と共に父の遺言を守りて夜にげしりて都に伴ひ上りぬ。かくて姫君の行末を祈らんさて初瀬の観音に詣て或宿をかりて休らふ折ふし

○玉葛

候ひけるぞや古き歌に。ふた本の杉のたちどを尋ずは。古川の邊に君をみましやこは。何ごよまれたる古歌にて候ぞ。是は光源氏のいにしへ。玉かつらの内侍此はつせに詣で給ひしを。右近こかや見奉りてよみし歌なり。共にあはれをばし召て御跡を。よく吊らひ給ひ候へ。實や有し世を猶夕貌の露の身の。消にし跡は中々に何なでしこのかた見もうし。あはれ思ひの玉葛かけてもいさやしらざりし。心づくしのこの間の月。雲井の余所にいつしか。鄙の住居のうきのみか扱しも絶て有べき身を。猶しほり行人心の。あちき浪風たちへたて。たよりこなれば早船に。乗をくれじご松浦がた。唐土船をしたひしに心ぞかはる我はた。浮島を漕離ても行方や何くこまりこ白波に。ひどきの灘もす

玉葛



陸

羽

夕貌の上の侍
女なりし右近
さいひし女。夕
貌の上なくな
り給ひて後。源
氏の御方に置
れしに。此右近
も姫君の御行
末を知らせ給
へさて初瀬へ
まふで。同じ宿
にさまりて。ほ
からす爰にめ
ぐりあひて共
に歸京し。右近
は源氏の御方
に参りて。姫君

き。思ひにさはる方もなし。かくて都の中こても。我は浮たる
舟のうち。猶やうきめを水鳥の陸にまごへるこくちしてた
つきもしらぬ身の程を。思ひ歎きてゆきなやむ。足曳の大和
路や。唐土迄も聞ゆなる。初瀬の寺に詣でつる。年もへ
ぬ。祈る契りは泊瀬山尾上の鐘のようにならぬ。思ひ絶にし古
の人に二度ふた本の。杉の立所を尋ねずは。古川のべと詠め
ける。けふの逢瀬も同じ身を思へば法の衣の。玉ならばたま
かづら。迷ひをてらし給へや。實ふるき世の物語。さけは涙も
こもり江にこもれる水の哀かな。女上「あはれこも思ひは初
よ初瀬川。早くも知や浅からぬ。縁にひかるゝ。心こて。
只頼むぞよ法の人。吊ひ給へ我こそは。涙の露の玉の名と名
乗もやらす成にけりく。女「扱は玉葛の内侍かりに顯れ

○玉葛

に尋ねあひし
事を申しけれ
ば。程なく六條
院へ迎へ給ひ
ぬ。後立身して
内侍のかみさ
なり。髭黒大將
の室さなる。此
論はこの小傳
にもとづきて
作れるものに
て。まづ諸國一
見の旅僧が山
和の國奈良の
京に滞在して。
同地の靈佛靈
社ことごとく

○玉 葛

給ひけるぞや。假業因重くとも照さざらめや日の光り〜。
大慈大悲のちかひある。法の燈火あきらかに。なき影いさや
こむらはん〜。戀わたる。身はそれならで。玉葛いか
なる筋を。尋ねきぬらん。たづねても。法の教えに逢んこの。
心ひかる〜一筋に。其儘ならで玉かづらの。乱る〜色は恥か
しや。つくもがみ。つくも髪。我や戀らじ面影に。立
やあだなる塵の身は。拂へ〜執心の。長き闇路や
く。思ひ哉。實安執の雲霧の。〜。迷ひもよしや憂かり
ける。人を初瀬の山下風。烈しく落て。露も涙も散々に秋の
はの身も朽果ね恨めしや。恨は人をも世をも。うらみは
人をも世をも。思ひ思はじたぐ身ひこつ。報ひの罪や數々

参拜し。夫より
同國式上郡に
ある豊山神樂
院長谷寺(切瀬
寺を云ふ)に安
置する觀音に
参詣せん。て京の宿を立ちいで。途中神社佛閣を拜し。四方のけしきをながめつゝ初瀬
川に着す。此川は水淺くして激流なるに。一人の女性が小舟に棹さし岩間を傳ふ有様い
さふしぎに感じければ。女にむかつて云ふやう。御身はいかなる人あるや。女こたへて
妾ははつ瀬寺に詣て來るものなりと。やがて舟より上り。旅僧と連れ立て所どころのけ
しきをなつかめかたらひつゝ。三輪明神の邊なる二本の杉に着きければ。女はやがて僧に
むかひ。これこそ名高き二もこの杉なり。よく〜御覽あれかしと云ふ。旅僧これなうち
ふがめて。さては名高き二本の杉さばこの杉のこさふるか。二本の杉のたちごを尋ねず
は古川野邊に君を見ましや。とは何さよみたる古歌なるぞと問ひければ。女答へて云ふ
やう。このうたは光る源氏のいにしへ。玉葛の内侍この初瀬に詣て給ひしとき。内侍の母
君に召仕はれし右近と云ひし女も。このはつ瀬寺に詣ても。内侍にめぐりあひてよみし
うたなりと。むかしがたりなごし。終にいつさふく失せけるにぞ。旅僧心に感ずることあ

○玉 葛

の浮名に立しも懺悔の有様。或ひは涌かへり。岩もる水の思
ひにむせび。或はこがる〜やみよりに出る玉と見る迄つゝ
めども。螢に乱れつる。影もよしなや恥かしやと。此安執を翻
へす。心は眞女の玉葛。心は眞女の玉葛。長き夢路は覺にけり

り。今の女は玉葛の内侍かりに顯はれ。我が吊らひを望みしものふるべしと。やがて珠敷をつまぐり經文をひもとき。たさひ業因重くとも。一心こめて回向の折から「戀わたる身はそれならで玉葛いかなる筋をたづねきぬらん」と一首のうたを詠じつと。玉葛の内侍の幽靈あらはれ。妄執をばらし懺悔の一節をかふで給ふこととせり

○卷絹

いつの頃の御宇にや。時の帝不思議の靈夢を蒙り給ひ。千正の卷絹を紀伊の國御熊野に納め申すべしとの勅詔を下し給ふ。臣下其宣旨を奉じて國々よりこれをおつめ。御

○卷 葛

卷 絹

是は當今に仕へ奉る臣下也。扱も我君あらたなる靈夢を蒙り給ひ。千足の卷絹を。御熊野に納め申せこの宣旨にまかせ。國々より卷絹をおつめ申候。去間都より参るべき卷絹未遅り候。参りて候はく。神前に納めばやご存候。今を始の旅衣。く紀の路にいざや急がん。都の手ぶりなり。り。ても。旅はこころの安かるべきか。殊さら是は王土の命重荷をかくる南の國。きくだに遠き千里の濱邊。山は苔路のさがしきを。いつかはこえん旅の道。休らふまもなき。心かな

熊野に奉納す。爰に都方の男勅命によりて御熊野に納め奉るべき卷絹を携へ旅路に上り。山を越え川を渡り日を重れ宿を経て御熊野の御山に着し。まづ音なしの天神に参拜せしに。折ふし冬梅の咲き匂へるに。ふさ一首のうたを詠し。南無天

○卷 絹

是。こ。ても。君。の。恵。み。に。よ。も。と。れ。じ。朝。も。よ。ひ。紀。の。關。越。て。遙。く。山。ま。た。山。を。そ。こ。こ。し。も。分。け。つ。ゆ。け。は。是。ぞ。此。今。を。は。じ。め。て。御。熊。野。の。お。山。に。は。や。く。着。に。け。り。く。急。候。程。に。御。熊。野。に。着。て。候。先。音。なし。の。天。神。に。参。ら。ば。や。ご。思。ひ。候。や。冬。梅。の。匂。ひ。の。聞。え。候。何。く。に。か。候。覧。こ。れ。な。る。梅。に。て。候。此。梅。を。見。て。な。に。ご。な。く。思。ひ。つ。ら。ね。て。候。南。無。天。滿。天。神。心。中。の。ね。が。ひ。を。か。な。へ。給。ひ。候。へ。ご。い。ひ。も。あ。へ。ね。ば。言。の。は。を。心。の。中。に。手。向。つ。急。き。参。り。て。先。君。に。つ。か。へ。申。さ。ん。調。い。か。に。申。候。都。より。卷。絹。を。持。て。参。り。て。候。何。こ。て。遅。は。り。た。る。ぞ。其。爲。に。こ。そ。日。數。を。定。め。参。る。中。に。汝。一。人。愚。なる。其。身。の。科。は。の。か。れ。じ。ご。や。が。て。い。ま。し。め。あ。ら。け。な。き。苦。し。み。を。見。せ。て。ま。の。あ。た。り。罪。の。む。く。ひ。を。し。ら。せ。け。り。く。な。ふ。そ。の。下。人

満天神我が心
中の願ひを
なへ給へ。云
ひもあへず彼
一首の歌を手
向け。夫れより
奏者の方に到
りて都より卷
絹を持ち只今
到着せしこと
を届け出でけ
れば奏者は彼
にうちむかひ
て。何さてかく
は遅刻せしぞ。
其爲めにこそ
日敷を定め置

をば何しにいましめ給ふそ。其者はきのふ音なしの天神に
て。一首の歌をよみ我に手向しものなれば。納受あれば神惠
すこし涼しき三熱の。苦しみをまねかるそののみか。人倫心
なし其繩さけ社。さけや手くしの乱れ髪。 上同 解けや手く
しの乱れ髪の。神はうけずやみしめのなはの。ひきたてごか
んご此手をみれば。心ぞよくも岩代の松の何ごかむすびし。
情なや。 男セル上 扱是は何ご申さる御事にて候ぞ。 此者は
きのふ音無の天神にて。一首の歌を讀我に手向し者なれば。
ごくく繩をさき給へ。 是は不思議なる事を承り候物
かな。か程賤しき者の歌なごよむべき事思ひもよらず候。い
かさまにもうたがはしき神慮かご存候。 猶は神慮を偽
るごや。さあらば彼者きのふ我に手向し言の葉の。其上の句

○巻 緒

きたるに。汝一
人愚なりさて
やがていまし
め。罪の報ひを
しらせる所に。
一人の神子出
で來たりて奏
者に云ふやう
その下人を何
のためいま
しめたまふや。
そのものはき
のふ音なしの
天神にて一首
のうたをよみ
我れに手向け
神慮にもかふ

をかれに問給へ。我また下をはつごくべし。 此上はごか
く申に及ばず。如何に汝誠に歌をよみたらば。其上の句を申
べし。 男セル上 今は憚申におよばず。彼音なしの山陰に。さも
うつくしき冬梅の。色ごごなりしを何ごなく。心もそみてか
くばかり。音無にかつさき初る梅の花。 句はざりせば
誰かこるべきご。讀しはうたがひなき物を。 本より正直
捨方便のちかひ。曇らぬ神心直なる故にかくばかり。納受あ
れば今はごや。うたがはせ給はで歌人をゆるさせ給ふべし。
または心中にかくし歌も神の。通力ご知なれば。實うたがひ
の仇心。打さけこのなはをごくくゆるしたまへや。夫神は
人の敬ふに依て威をまし。ひごは神の加護によれり
シテサシ「されは樂しむ世にあふ事。是又そうちの義によれり。

○巻 緒

ひしものなれば。その細ききへども。奏者はこれを許さず。かほごいやしき者がうたなきよむべき事なし。いかさまにもうたかはしき神慮なり。さて容易くもたがふべくもなければ。神子にふたゝび奏者にむかひて。なほも神慮を

言葉すくなうして理りを含み。さんなむみゝたえてじやくねんかんちやうの床の上には。ねふり遙に。眼をさる。是によつて。本有の靈光忽に照し自性の月。漸く雲おさまれり。一首を詠ずれば。よろづの悪念を遠ざかり天をうれば清く地を得れば寧しあらかしめ。ゆふいふ一じつさうゆい一金剛ごはごかずや。上シテ「されば天竺の。波罪門僧正は。行人菩薩の御手を取。靈山の。釋迦のみもこに契りて眞如くちせずあひみつこ詠歌あれば御返歌に。かびらえに契りし事のかひ有て。文珠の御顔を。れがむ也。たがひに。佛くをあらはすも和歌の徳にあらずや。又神は出雲八重垣かたそぎの寒きよのためしいはずこもつたへ聞つべし。神のしめいう糸櫻のかぜのごげこそ思はする。下キ開「さあらばのつこを參らせ

巻 緒

卷
絹



晴明
陸

いつわるさび。さあらば彼のものに我れに手向けし言の葉の。その上みの句をたづね給へ。我れまた下をばつまくべしと云ひければ。奏者も今は尤もて都の男にうちむかひ汝まこと神うたをよみ。神に手向けし事ふらば。その上の句を申すべ

られて。神をすゞしめ御申候へ。心得申候。謹上再はい。抑當山は。ほつしやうこくのたつみ。金剛山のれいくわう。此地にこんで靈地となり。今の大峯是也。されば御嶽は金剛界のまんだら。けさう世界。熊野は胎藏界。見つこん浄土。有かだや。ふすぎや祝詞のみこもの狂ひ。くのさもあらたなる。飛行を出して。神語する社。恐ろしけれ。證據殿は阿みだ如來。十悪を導き。五逆をあはれむ。中のごんぜんは。やくし如來。薬ごなつて。ふたよをたすく。一萬文球。三世の覺母だり。十萬普賢。まんさん護法。數の神。彼かんなぎにつくも髮の。御幣もみだれて空にごぶ鳥の。かけりく。て地にまた躍り。珠數をもみ袖をふり。こそくげそ

しと云ひけるに。都の男うれしげに今は憚る所なし。彼の音なしの山かげに。さもうつくしき冬梅の色。こさふりしを何となく。こるにそみて。音なしにかつさきそむる梅の花。こよみければ。神子はこれをうけつめて。けて「句はざりせば誰れか。しるべき」とよみしは疑ひなきものを。今ははやうたがはせ給はで。この歌人を許し給へと云ふ。奏者こゝに於て繩をさく。都の男はうたの徳によりて不圖も神助を得。いさまな給はりみやこへかへる。神子は夫れより神威の。おかしすべからざるこさふ。ものがたりてのち。祝詞を参らせ神をすゝしめ。神樂をかなでるその勳止のの形に。神ののりうつりたるおもむきありて。終りに神は上りまここの神子とあると云ふことな。作れるものふり

○麻 當

當麻寺は和州二上か嶺の下。丸子山の麓にあり。二上山萬法藏院禪林寺

く。の舞の手をつくし。是までなれや。神はあがらせ給ふと云捨る。聲のうちより狂ひさめて又本性にぞ成にける

當 摩

次第ヲシヨクテ教ヘ嬉シキ法ノカゴ。く。ひらくる道に出ふよ
 是は念佛の行者にて候。我此度三熊野に参り。今は下向道なれば。是より大和路にかゝり。當摩の御寺に参らばやと

と號す。本堂は觀音也。受陀羅堂と云ふ勅額あり。中將姫の蓮糸を以て織り給ひし眞の受陀羅は。本堂の後にある室藏に納めり。と云ふ。天平寶字年中。右大臣豊成の女。中將姫此の寺に入りて。尼となり。一心に佛道に趣き。我れ眞の彌陀を拜ますん

思ひ候 道行 程もなく歸り紀の路の關越て。く。こや三熊野の岩田河。浪もあなるなり朝日影よる晝わかぬこゝちして。雲はそなたに遠かりし。二上山の麓なる。當摩の寺につきにけり。く。一念彌陀佛即滅無量罪共説れたり
 萬諸聖教皆是阿彌陀もありげに候 釋迦はやり
 彌陀は導く一筋に。こゝろゆるすな南無あみだ佛と
 唱ふれば。佛も我もなかりけり 南無あみだ佛
 の聲はかり 下シアアズ 涼しき道は。頼もしや 濁りにしまぬ蓮の糸。濁りにしまぬはすの糸の。五色にいかでそみぬらん 有難や諸佛のちかひ様々なれ共。わきて超世の悲願。こて。迷ひの中にも殊に猶。いつくの雲は晴やらぬ。雨夜の月の影をだに。しらぬ心のゆくへをや西へと計憑むらん。

は寺を出まじ
き醫ふ。或るま
き一人の比丘
尼來り語て曰
く。我れ汝の爲
めに彌陀如來
を拜ましめん。
すべからく百
駄の蓮莖を集
むべく。中將尼
帝に奏し給へ
は。詔して蓮莖
を送らしむ。其
さき化尼自か
ら莖を折り糸
を取りて新井
を穿つて之を

○當麻

實や頼めは近き道を。何はるくご。思ふらん 末の世
に迷ふ我等が爲なれや 説殘す御法は是そ一聲のく。
みだのをしへを頼まずは。末の法。萬年くふる迄に餘經の
法はよもあらし。適く此生に浮まずは。又いつの世をまつ
の戸の。明れは出て暮る迄法の場にまじる也御法の場にま
じる也 いかには是成かたぐに尋申すへき事の候
此方の事にて候か何事にて候ぞ 此れは當摩の御
寺にて候か さん候たえまの御寺ごも申。又當摩寺共申
なり 又是成池は蓮の糸を。すくきて清めし其故に。
染殿の井ごも申ごかや あれは當麻寺 是は染寺
また此池はそめごのく 色々様々所々の。法の見物聞
法ありごも。それをもいさやしらいごの。唯一筋ご一心不乱

瀧く。五色燦然
たり。其後又一
人の女來たり。
化尼に問うて
曰く糸成るや。
答へて曰く成
れり。化女糸を
得て殿の西北
の角に於て之
を織る。初更よ
りはしめて四
更に成就す。其
幅一丈五尺。蠶
三把を以て油
二升に浸して
燭を爲す。化女
は化尼に捧げ

○當麻

に。なむあみだ佛 實有難き人の言葉。即是こそみ
だ一教なれ。扱またこれなる花櫻。常の色にはかわりつゝ是
も故ある寶樹ご見えたり 實よく御覽し分られたり。あ
れこそはすの糸を染て 掛てほされし櫻木の。花も
心の有故に。蓮の色に咲ごもいへり 中くなれやもこ
よりも。草木國土成佛の。色香にそめる花心の 法の潤
ひたねそへて 濁にしまぬはすのいごを すすき清
めし人の心の 迷ひをほすは 花ざくらの 色は
えて掛し蓮のいござくら。花の錦のたてぬきに。雲の
だえまに晴曇る雪も緑も紅も。唯一聲の誘はんや西ふく秋
のかぜならん 猶々。當麻の曼陀羅の謂委御物語
候へ 抑此當麻のまんだらご申は。人皇四十七代の帝

授く。化尼は中將尼に與ふ。淨土の衆相悉く備はれり。中將尼大ききよるこび。節なき竹を求めて軸を爲す。而して後化女忍然と見えず。化尼偈を作り圖を禮して曰く。往昔迦葉說法の所。佛事新に起る。又故あり。君が惡志を感じて我れ爰に來れり

○當麻

御宇かごよ。横萩の右大臣豊成ご申せし人。その御息女中將姫。此山にこもり給ひつゝ。稱讚淨土經。毎日讀誦し給ひしか。心中に誓ひ給ふやう。ねがはくは正身のみだ來迎あつて。我に拜まれおはしませご。一心不亂に觀念し給ふシテ下。しからずは畢命を期ごして。此草庵を出しご誓つて。一向に念佛三昧の定にいり給ふ。所は山陰の。松吹風も涼しくて。さながら夏を忘れ水の。音も絶々に心耳をすます夜もすがら。稱名觀念のゆかの上。座禪圓月の窓のうち。寥々ごある折節に。一人の老尼の。忽然と來りたゞすめり。是はいかなる人やらんご。尋ねさせ給ひしに。老尼答へて宣はく。誰ごはなごや愚なり。よへばこそ來りたれご。仰せられける程に。中將姫はあきれつゝ。我は誰をかよぶご鳥。たつきも

一たび道場に至らば永く苦を離れんご。中將尼問ふて曰く。善哉知識いづくより來りたり給ふぞ。又さきの女は誰さか云ふ。答へて曰く。我れは西方の教主ふり。さきの女は觀音大士なりと云ひをばつて空を凌きて西の方へ去り給ふ。中將尼こ

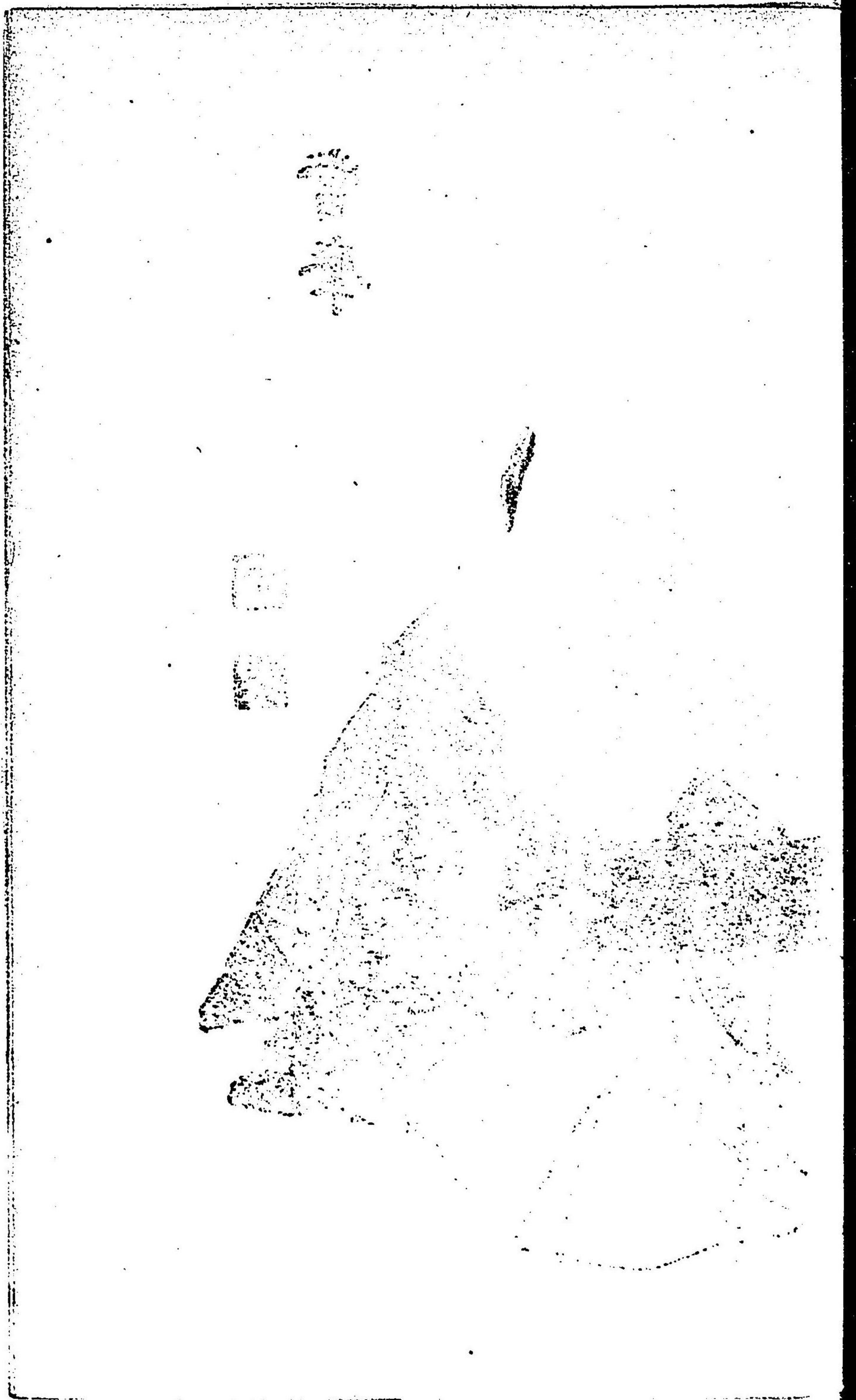
しらぬ山中に。聲たつる事迎は。南無あみだ佛の唱へならで又他事もなき物をこ。答へさせ給ひしに。夫こそ我名なれ聲をしるべに來れりご。宣へば姫君も扱は此願成就して。正身の彌陀如來。實來迎の時節よご。感涙肝にめいじつゝ。綺羅衣の御袖も。しほるばかりに見へ給ふ。實や貴き物語。即みだの教へぞご思ふにつきて有難や。しも二月中の五日にて。然も時正の時節なり。御事をなさん爲今此寺にきたりたり。御事の爲に來るごは。そもやいかなる御事ぞ。今は何をかつゝむべき。そのいにしへの化尼化女の。夢中に現し來れりご。二云もあへねは。光りさして。花ふり異香薫じ。音樂の聲すなり。耻かしや旅人よ暇申て歸る山の。二上の嶽ごは二上の。山ごこそ

○當麻

れより精修ま
すくつさむ。
寶龜六年三月
十四日安座念
佛して終りた
まふ。年二十九
とあり。以上の
縁起によりて
この話を作曲
せしものにて。
まづ念佛の行
者が三熊野に
参詣し。其下向
道に大和路に
かかり。當麻の
御寺に参詣す。
爰に二人の女

○當麻

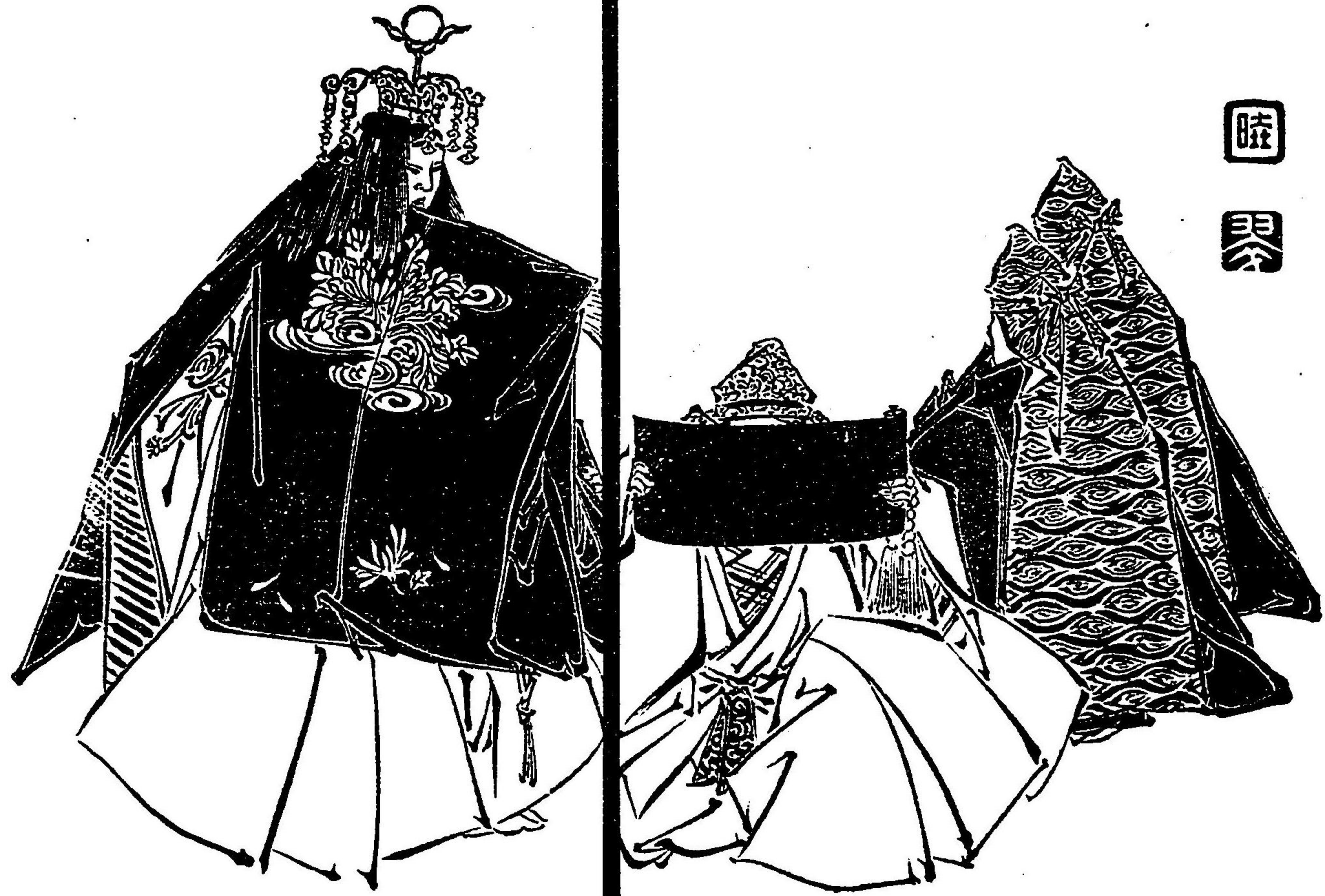
人はいへこ。誠は此尼かのぼりし山なる故に。二上の嵩は
申なり老のさかをのぼり上る雲に乗てあがりけり紫雲に乗
てあがりけり。かく有難き御事なれば。重ねて奇特を
おかまんこ。いひもあへねはふしぎやな。妙音さこ
え光さし。かぶの菩薩のまのあたり。顯はれ給ふふしぎさよ
唯今夢中に顯れたるは。中將姫の精魂なり。我
娑婆に有し時。稱讚淨土經。朝夕時々怠たらず。信心まこ
ご成し故に。微明安樂の潔界の衆となり。本覺眞如の圓闕に
座せり。しかれども。爰をさる事遠からずして。法身却來の
法味をなせり。有難や。盡虚空界の莊嚴は。眼は雲路に
かくやき。轉妙法輪の音聲は。聽寶刹の耳にみたり
蕭然とある曉のころ。誠に涼しき。道にひかる光



當摩

睦

翠



性出で。僧か
たづねたる當
麻寺の縁起な
さ物がたりす
る。こゝあり。夫
より人皇四十
七代の帝の御
宇に。横萩右大
臣豊成と申し
ゝ方の息女申
將姫この山に
こもり。稱讚淨
土經を毎日讀
誦し給ひ。心中
に誓ふて正身
の彌陀來迎あ
つて。我れに拜
まれ給へ。一心不亂に觀念し。念佛三昧の定うに入る。山陰の松風も涼し

○當 麻

陰のこゝろ地をしむへしやなく。時はひこをもまたざる
物を則爰ぞ。唯心の淨土經いたゞきまつれやく。接取不捨
爲一切世間説此難信地上之法。是爲甚難シテ實も此
法はなはだしければ。信する事もかたかるべしこや
唯たのため地頼めやたのためシテ上慈悲加祐地令心不亂
にシテみだるなよ地乱るなよシテ十聲も地一聲ぞ。有
かたやシテ下後夜の鐘の音。くふせうのひびき。稱名の妙
音の見佛聞法いろくの法事。實もあまねき光明遍照十方
の衆生をたゞ西方に。むかへゆく。御のりの船のみなれ棹。
御法のふねのさをなぐるまのゆめの。夜はほのくこそ成
にける

く。さながら夏を忘るゝばかり。水の音も絶々に心耳をすます夜もすから。座禪圓月の窓のうら。簾々さある折りふしに。西方の教主並に觀音大士の。化女化尼の來りて。蓮の莖を折り糸をとりて。機織るばかりの支度をさゝのへ。中將姫にこれを授け忽然として消へうせ給ふ。中將姫はこの奇特に感じて。一層精修して蓮糸の曼陀羅を織り。その佛恩に報ひたまひし等の物語りを爲し。後ち中將姫の精魂顯はれて念佛の行者に奇特を示したまふさいふ事とせり

○金札

○金札

桓武天皇延暦十三年山城の國愛宕の郡に平の都を建てたまひし後ち。同國紀伊の郡伏見の里に大宮づくりあるべしとて勅使を下向せしめ

金札

次第 ツヨク風も靜にならのはの。く。ならさぬ枝ぞの。ごけき。抑これは桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。扱も山城國愛宕郡に。平の都を立置給ひ。國土安全の砌なり。おなじく當國伏見のさきに。大宮作り有へきこの勅定を蒙り。唯今伏見に下向仕候。夫久かたの神代より。天地開けし國の起り。天の二銚の直なるや。名も二はしらの神こゝに。八島の國を造りたき。すべら世なれや大君の。御影長閑き。時ごかや青

らるゝ。勅使下向の日。此地に參詣する者數多ある中に。勅使の先きにすゝみ行くいとあやしげなる宜禰あり。勅使ふしんに思ふて彼の宜禰にむかひ。御身は何處より參詣にきたりたるやと問ふ。彼の宜禰答へて我は伊勢の國阿漕が浦に住む

○金札

丹よし奈良の葉守の神心。く。末暗からぬ都路の。すぐ成へきか菅原や伏見のさきの宮作り。大内山の陰高き。雲の上なる玉殿の。月もひかりや磨くらんく。荒貴の御作りや。聞も名高き雲の垣。霞の軒も玉簾。かゝる時代に逢事よご。命うれしき長生の。天晴老の思出や。不思議やな參詣の人々多き中に。けしたる宜禰御幸の先にすゝむぞや。そも御身はいづくより參詣の人ぞ。是は伊勢の國あこぎが浦に住者なるが。當社伏見の大宮作り。天も納受し地もうるほ。王法を尊ひ來りたり。そも王法をたつごむごは。如何成望みのあるやらん。そもかゝる身の望みごは。空怖しや此年迄。命すにほに愁もなく。上直なれは下迄も。ゆたかに治まる此國の千代をこめたる竹の杖伏

ものなるが、當社伏見の大宮造り。天も納受し地もうるほふ。王法を尊み來りたりと云ふ。勅使置れて王法をたつとむさば。何にか望みのあるやらん。と問ふ。宜禰答へていやか。る身の望みさば。そらおそるしや。この年まで。命すなほにうれひも

○金札

見は是か宮所。参りて拜むこそ朝恩をしれるこころなれ

上筒 春は花山の木をされば。く。袂にかゝるしら雪。ふかき

井けたをさるなるは。らんせいにつるべなは。また泰山の山

した水其巖石をきりいし。上筒 車を作る推の木。く。

シテ上 船をさくするやうりう。上地 木の間になさん槻の木

シテ下 それは秋たつ桐の木。地上 君に齡をゆづり葉や。千

年の松はさるまじ。上筒 名ははるのさの枝ながら。花はなご

柳葉。これは神の宿り木恐れありさるまじ。シテ詞 荒ふしぎ

や。天より金札の降下りて候。則金色の文字すわれりよみ上

給へ。ワキ詞 實に天より金札の降下りて候ぞや。取上讀てみ

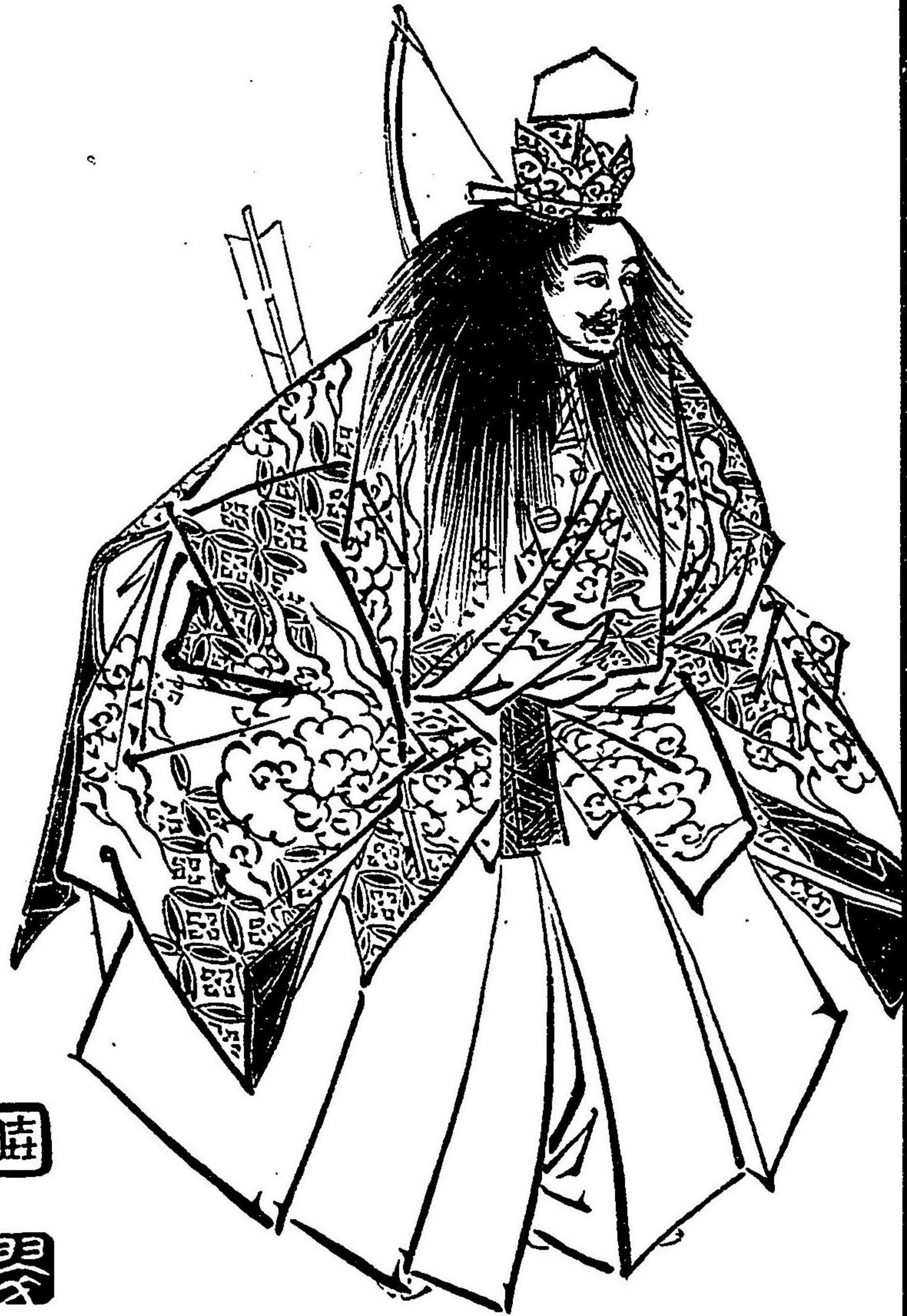
れば何々。抑我國は。眞如法身の玉垣の。内にすめるや御齋

川の。流れ絶さず守らん爲に。伏見に住ん誓をなす

金札



金
札



陸
嬰



なく。上直ぐな
れば下までも。
ゆたかに治ま
る此國のこれ
が宮所なれば
参りて拜むこ
そ朝恩をしれ
るこゝろなれ
さ。此の物語の
折から天より
金札降り下り
しさて。彼の宜
願其金札に金
色の文字ある
を讀上げ給へ
さて勅使に奉
る。勅使これな

シテ詞ニテ
扱此伏見とは。何ぞかしろし召れて候ぞ
ワキセハル上「ここと

もおろかや伏見の宮居。この御社の事なるへし
シテ詞「アノナロカ

伏見とは。惣じて日本の名也。伊弉諾伊弉册尊。天のいはく
シテ詞「アノナロカ

らの苦薙に。臥て見出したりし國なれば。伏見とは此秋津洲
シテ詞「アノナロカ

の名なるへし。人しらぬここと也此國も伏見さこの名も。
シテ詞「アノナロカ

ふしみる夢も現も。わかぬ光りの中よりも。金の札をお
シテ詞「アノナロカ

つ取て。かき消す様に失けるか。しはし虚空に聲ありて
シテ上「アノナロカ

「是は伊勢大神宮の御つかわしめ。天津太魂の神なり。猶
シテ上「アノナロカ

しも我を拜まんと思は。重て宮居を作り崇むべしと
上同「アノナロカ

迦陵頻伽の色はかり虚空に残り。雲も成雨も成やいかづ
上同「アノナロカ

ちの。光のうちに入にけり。樂にひかれてこごりそ
上同「アノナロカ

の。舞の袖こそ。緩くなれ。守るべし。わが國なればす
後シテ上「アノナロカ

○金札



取り上げ織みて見れば。我國は眞如法身の玉垣の内に住めるや御裳濯川の流絶えせす守らん爲めに。伏見に住まんさ誓ひな爲すさあり。宜彌勅使に問ふに。此伏見に申すこと何ぞ知るしめさるるや。云ふ。勅使答へて伏見の宮居はこの御

べらきの。万代いつこ。限らまし。かきらじなく。さかゆく御代を守りのしるし。唯おもくせよ。神君重くすべしや。扉も金のみふだの神体光りもあらたに見え給ふ。四海を治めし御姿。あらたに見よや君守る。八百よろづ代のしるしなれや。悪魔降伏の眞如の月弓扱またつぎにはさばへなす。荒ふる神もはらへのひもろぎ其神託は数々に。左も右も神力の。悪魔を射拂ひ清めをなすも金胎両部のかたちなり。迎おさまる國なれば。中々なれや。君は船。臣は水穂の國も豊かに治る代なれば。東夷西戒。南蠻北狄の恐れなければ。弓をはずし。劍を納め。君もすなほに民を守りのみふだはみやに。おさまり給へは影さしおろす玉簾。かけさしおろすたますだれの。ゆる

社のことなるべしと云ふ。宜彌ありおるかのことを云ひ給ふや。抑も伏見と云ふは。總じて日本の名にして。伊弉諾伊弉冉の尊。天の磐座の菩むしるに臥して見出だし給ひし國なれば。伏見は此の秋津洲の名なるべし。と物語りつゝ忽然と彼の金札をおつ取つてかき消すやうに失せけるが。しげし虚空に聲ありて。我は伊勢大神宮の御つかはしめ。天津太玉の神なり。猶しも我れを拜まんと思はと。重れて宮居を作り崇むべしと。迦陵頻伽の聲を殘して。姿ながくし。やがて神姿を顯はし給ひて。南壁北狄悪魔を射拂ひ神力の四海に普き奇特をしめし給ふことを作りたるものなり

がぬ御代こそ成にける

○春榮
この話の出處未だ分明からざれども。まづ其仕組を記さん。高橋權頭家次と云ふ人宇治橋の合戦

春榮

是は高橋權頭家次にて候。扱も此度宇治橋の合戦に味方打勝。分捕高名數を盡す。某か手にも囚人あまた候中にも。春榮殿ご申をさなき人を生捕申て候。此由を申上て候へは。近き程に誅し申せこの御事にて候あひだ。春榮殿へ此よこ

に勝利を得。且つ此手に増尾春榮丸と云ふ少年を生捕。これを預り居る所に春榮が兄なる増尾太郎種直と云ふもの弟春榮が近きうち刑戮につかんとしを聞及び命のうち今一度對面せんと高橋の館を訪ふたる處。元來囚人のゆかりのし

○春榮

を申さばやと存候 次第二人 ちらぬ先に尋ね行。花をや風のさそふらん シテ上 是は武藏の國の住人。増尾の太郎種直にて候。儲も今度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ。其矢をぬかん少傍に引退候隙に。弟にて候春榮深入し闇ここ生捕れて候。又承り候へは。近きうち誅せらるよし申候間。今一度對面の爲。只今春榮がありかへ急候 道行 二人 すみなれし都の空は雲るにて。朝立そふる旅衣ひもかさなりて行程に。名にのみ聞し伊豆のこう。三島の里につきにけり シテ調 急候程に。伊豆の三島に着て候。いかに小太郎 トモ調 御前に候 シテ 此所にて囚入の奉行をは高橋とやらん申候。尋て對面し度よし申候へ トモ 畏て候。如何に案内申候。高橋殿と申はいづくに御座候そ トモ 是は春榮殿のゆか

のに、對面させんこと、堅く禁制の事なれども。囚人のうち春榮は高橋の特に痛はるものにて、終に對面を許されしも。春榮がこゝろにては。もし我兄なること知るからば。萬一同様誅せられんも計られざれば。家人と云ふて。命れなかつし。命

○春榮

りの者にて候か。高橋殿へそご御目にかゝり度事の候ひて。これ迄参りて候。其由能々御心得有て御申候へ ワキ調 何ご春榮殿のゆかりの人にて有か。某に對面したきよし申か。惣て囚人のゆかりに對面はかたく禁制にて候へとも。春榮殿の御事は。別してそれか。しいたはり申候間。そご對面申さうずるにて有ぞさりながら。大法にて候間。太刀かたなを預り候へ トモ 是に候 トモ さらは其よしを申候へし。暫く御待有て給はり候へ トモ 御参りのよし申て候得ば。めしうこのゆかりに御たいめんは禁制にて候得とも。春榮殿の御事は。高橋殿別して御いたはりにて候ほごに。御對面ならうずるごの御事にて候去ながら。御大法にて候程に。太刀かたな禁制のよし申候 シテ 扱なにご有へきぞ トモ 御大法ならばま

を助けまいら
せんさて、兄さ
は云はず家人
さして對面を
こばみけるを。
兄は反て兄弟
なることを名
乗りて弟に代
り誅せられん
ことを望み。若
し其希望を許
されざれば。共
に刑戮につか
んと云ふ。兄弟
の情こゝにあ
らばれ。高橋は
じめ其他の兵。

○春榮

ゐらせられ候へ。最前の人の渡り候が。太刀かたなをあ
づけ申候。春榮ごの由縁ご仰候はいづくに渡り候そ
シテ「これに候。是は春榮殿のためには何にて渡り候そ
シテ「さん候春榮が兄に。まし尾の太郎種直ご申者にて候。扱も
今度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ。其矢をぬかんごす
こしかたはらに引退候ひまに。弟にて候春榮深入しやみや
みご生捕れて候。又承り候へは。あかきうちに誅せられ候よ
し承り候程に。今一度たいめんのため。是まではるく参り
て候。此よし御申有て。春榮に引合せられて給り候へ。委
細うけ給り候。惣じて囚人のゆかりに對面はかたく禁制に
て候得ごも。春榮ごの御事は。それがし別して痛はり申候
間。其由を申對面させ申候へし。しばらくそれに御待候へ

皆一同感涙に
むせぶ。高橋は
一人の子を持
ちたれども。こ
の合戦にうち
死にせしかそ
の面ざしが。春
榮によく似て
居れば。萬一春
榮の命助かる
ことあらば。養
子にもらひて
一跡を相續い
たさせ度など。
種直にかたり
かたらふ其處
に。鎌倉よりの

○春榮

心得申候。いかに春榮殿へ申候。御身の御舎兄にまし
をの太郎種直ご御名乗有て。是迄御出にて候。急で御對面候
へ。是は誠しからず候。兄にて候者は。宇治橋の合戦にお
も手負。存命不定ご社承り候ひつれ。荒ふしきや。まさ
しく御舎兄ご仰候物を去ながら。先物のひまよりそご御覽
候へこなたへ渡候へ。あれに立たる男の事にて候。不思
議の事にて候。あれは兄にてはなし。譜代召仕し家人にて候
間。急き追歸して給り候へ。儲は誠に家人にて候か。さ
あらは臆て追歸し候へし。最前の人の渡候か。是に候
仰の通りを申て候得は。物の隙より御覽候ひて。兄にてはな
し。譜代召仕し家人にて候へは。急き追歸し申せごの御事に
て候。何迎聊爾成事をばうけ給り候そ。委細承り候。先

飛脚立て。箱根をこさぬそのさきに。囚人悉皆誅すべしとの命令に接しければ。先きにかりし養子のこども徒事にふりけりして。うち歎きしも今は詮なく。囚人一同に最期の用意あるべし。また種直には故郷へかへるべしと達しける。

○春榮

御心を静めて聞召れ候へ。家人の身ごして兄ご名乗。是迄参り候べきか。いか様にも御申有て。春榮に引合せられて給り候へ。某對面し。家人か兄かの勝劣を見せ申候へし。實は是は尤にて候。さらばたばかつて呼出し候へし。其時御對面有て委く仰候へ。いかに春榮殿に申候。只今の者は荒く申て追歸して候去ながら。彼者の心中餘りに不便に候間。うしろ姿をそご御覽候へ此方へ渡候へ。やあいかに春榮めずらしや。何ごて某を家人ごは申ぞ。抑も今度宇治はしの合戦に。おこご深入し闇ご生捕れぬ。されば其時のせんごをも見届けざる未練者を。兄ご名乗んも面よごしと思ふて家人ごは申か。去ながらおこご一所に誅けられん爲に。是迄遙々來りたるに。何ごて左様に家人ごは申ぞ。いかに汝

於て春榮種直二人の見弟。これなる守りは種直が守り佛の觀世音なれば。これをかたみにまいらすべし。また是るは春榮が最期の文あり。又春榮が黒髪は朝な夕なにひさ筋を千筋とまでさせたまひしもの。これをかたみにまいらす。兄

○春榮

は三世のよしみを思ひ。是迄遙々來りたる心ざし。返くも諱しけれ去ながら。汝は古郷に歸り母御に申へき様は。春榮社誅せられ候へ。逆まなる御ごふらいに社預り候へけれご。能申候へ。猶も家人ごくだすかや。深山木の其梢ごは見えざりし。櫻は花に顯れにけり。何ご家人ごくだす共終には隠れよもあらじ。時をえて早くもそたつ夏木立。その木をそれご見るべきか。早こくかへれごしかりけり。山皆そむる時雨にも。松はかはらぬならひぞかし。一千年の色ごても。雪にはしばしかくるごなり。是を物にたごふれば。殷のやうかは父をうち。晋のかくい師匠をうつ。今の増尾の春榮は。現在の兄を家人ごいふ。誠はふかき孝行なり。

第五にかたみ
なごとのへ。我
等のこりて御
あさを吊らふ
べきにさばな
くて。成人の子
をば先たて
ふげき給はん
母上の御こ
ろのうち思ひ
やられて御い
たはしく。遊
懐しつゝうち
しほれ。やがて
首座に直らん
ご。各々用意の
その處へ。鎌倉

○春 榮

シテ調「いや。ごにかくに命を捨る迄ぞ。種直是にて腹きらん。
や。刀は參らせつ。なふ御芳志に刀を給はり候へ。なふく
暫こは如何に。上命を助け申さん。て社家人ごは申しつ
れ忠が不忠になりけるかゆるさせ給へ兄御前く。種直も
春榮も。囚人守護の兵も。たがひの心を思ひやり。實物へ
きは兄弟也。共たもごをぬらしけり。言語道
斷。御兄弟の御心中を感し申。我等も落涙仕りて候。いかに
種直に申候。某春榮殿を痛はり申事餘の義にあらず。子を一
人持て候を。宇治橋の合戦にうたせて候が。此春榮殿の面さ
し少もたがはす候。天晴御命も助り給ひ候へかし。某申請一
跡をも繼せ申度この念願にて候。や。何ご申ぞ。荒何共なや。
只今申つる事も徒事にて候。又鎌倉より飛脚立て。箱根をこ

よりのはやう
ち來たるを。高
橋今はこれま
で。覺悟を
きはめて早打
に。其御使の旨
をさへば。若宮
別當の申出に
て。囚人七人免
状なり。意外
の命に。まづ氣
にかゝる春榮
の命はいかん
と早うち。こ
れを試みた
しければ。その
七人のうちな

さぬ先に囚人を皆誅し申せご仰出されて候。痛はしながら
あからなき事。春榮殿は御最後の御用意有ふするにて候。又
種直は故郷へ御歸り候へ。委細承り候。春榮が事は幼
き者の事にて候間。春榮を助け。某を誅して給り候へ
「仰は去事にて候へ共。はや目録にて御目に懸て候間。中
々なるまじく候。仰はさる事にて候へ共。大やけの私を
もつて。某を切て給り候へ。中々左様には成まじく候
「扱は力なき事。某をも諸共に誅して給り候へ。夫は
ごもかくもにて候。如何に春榮。古郷へ筐を贈り候へ。
いかに小太郎。御前に候。汝は故郷に歸り母御に申
べき様は。春榮が最後の有様餘りに見拾がたく候程に。某も
諸ごもに誅せられ候。さかさまなる御吊ひに社預り候へけ

○春 榮

りさ。聞くより
高橋天を拜し
うれしうれ
しうまづま
ん。若宮別當の
申しにより。四
人七人免状の
事。第一番には
別當の御弟豊
前の前司第二
ばんには豊後
の次郎。第三ば
んには増尾の
春榮丸。と讀み
かけらるが。殘
りはまづく
よみても益な

○春榮

れ。能く申候へ。是成守りは種直が。守り佛の觀世音。種直
か筐に御覽候へ。能く申し候へ。是なる文は春榮が。
最後の文にて候なり。又かたみには烏羽玉の。わが黒髮のす
そをきり。さばかり明暮一筋を。千筋なでさせ給ひし髮を。
春榮が筐にまゐらす。荒さだめなやさるにても。我
こそ残りて御あごをこふらふべきにさはなくて。成人の子
をは先だて。歎き給はん母上の御心のうち思ひやられ
ていたはしや。實や生ごしいけるもの何れも父母を悲
しまざる。必一世に限るへからず。世もつて父母の數々な
り。それ十二因縁より二十五有の沈輪。生じては死し
死しては生し。流轉にめぐること生々の親子皆もつて誰か
又自他ならん。然れば羊鹿午車に乗。火宅のさかひを

春
祭

睦

翠

